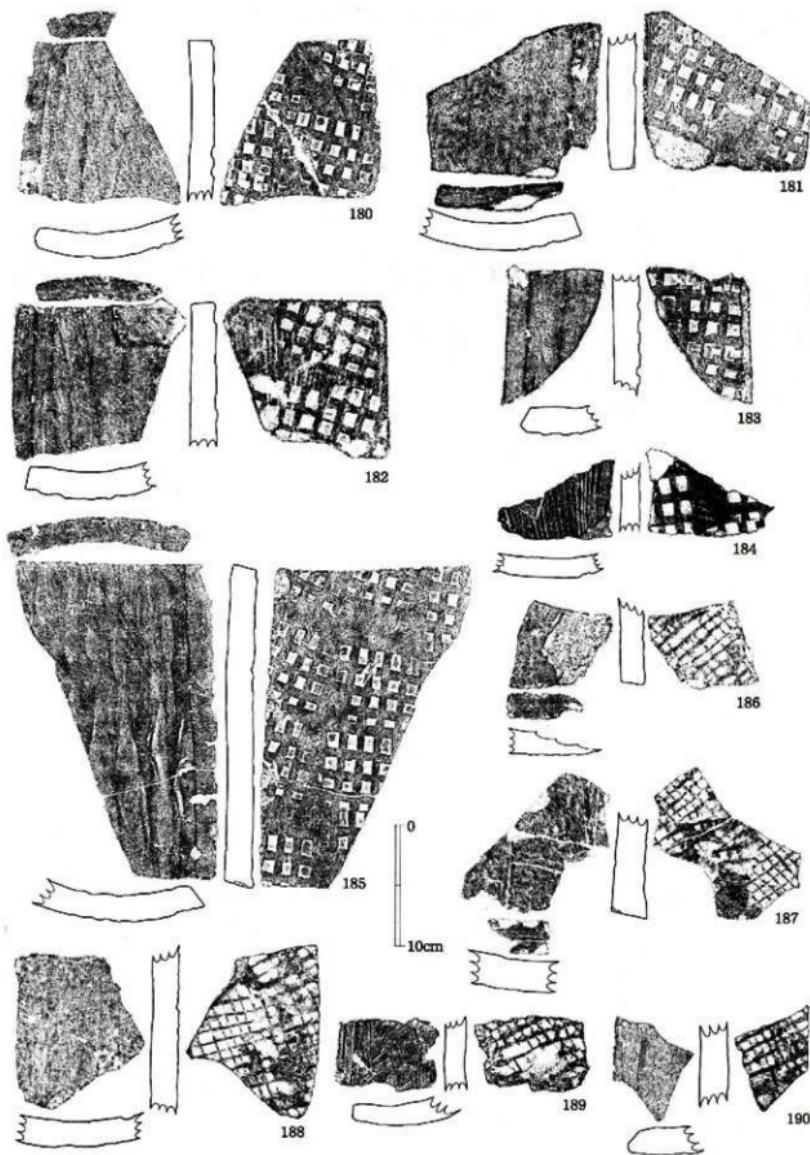
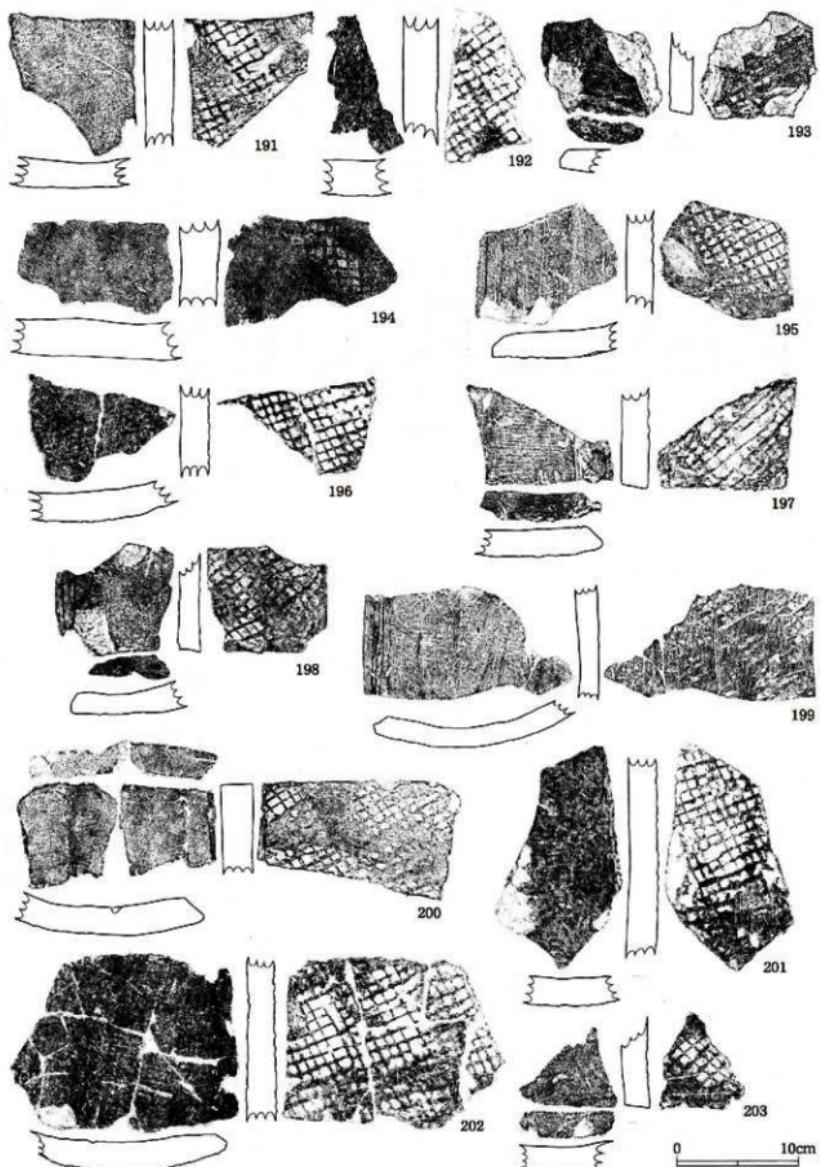


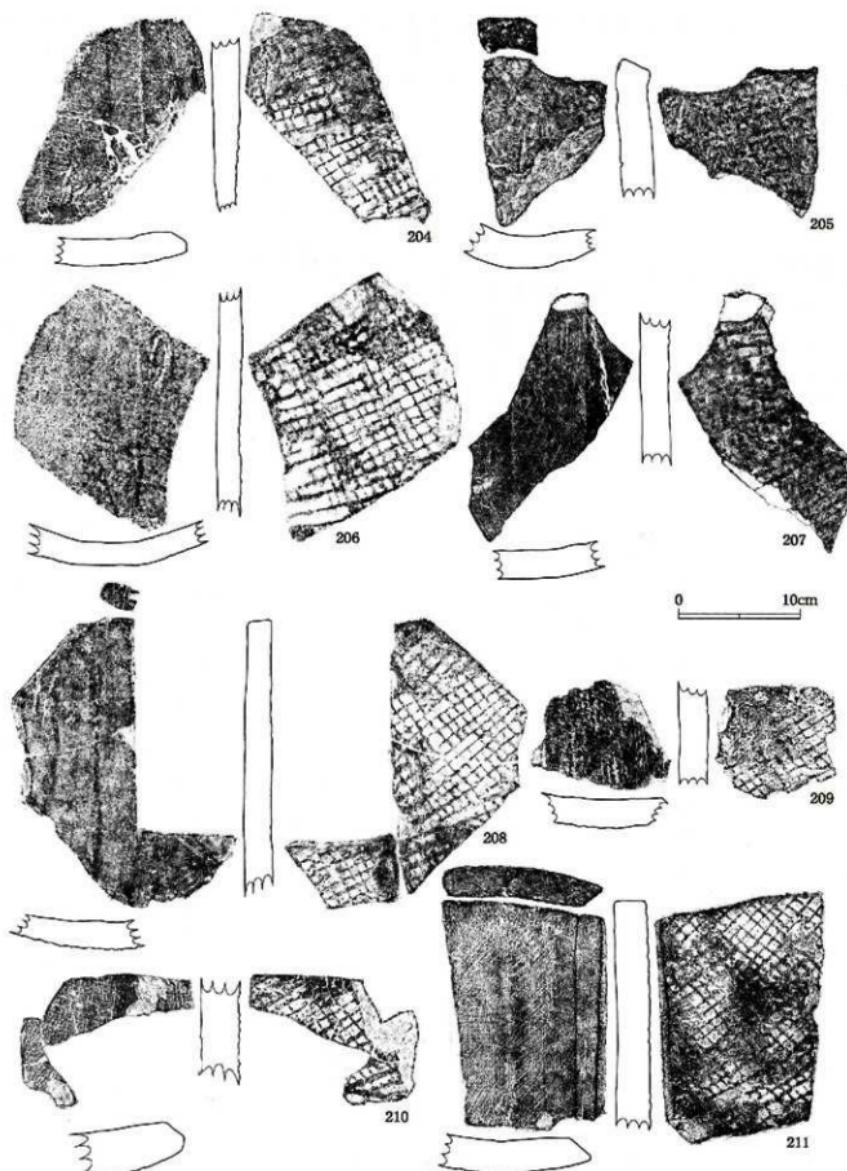
第30図 捶立柱建物 2柱壙方出土遺物（1）



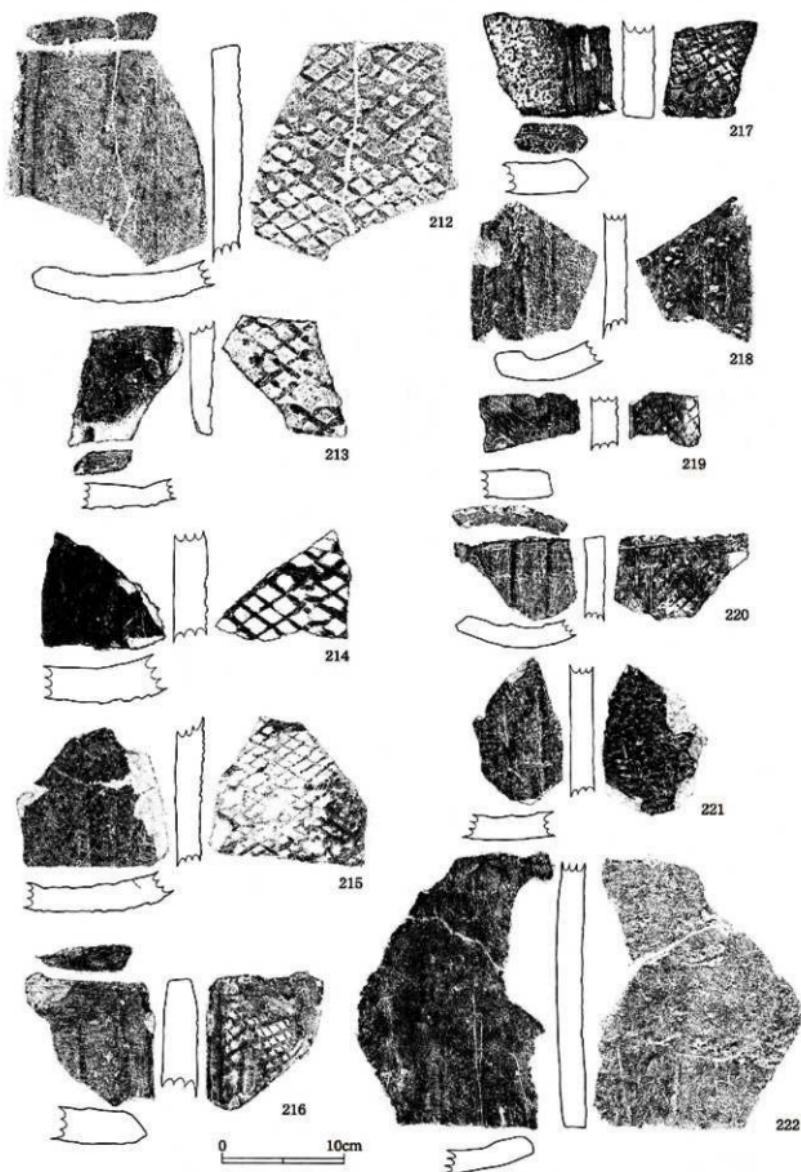
第31図 捜立柱建物2柱掘方出土遺物(2)



第32図 捜立柱建物 2柱掘方出土遺物（3）



第33図 捜立柱建物2柱掘方出土遺物(4)



第34図 捜立柱建物 2柱掘方出土遺物（5）

らの剥離面が明瞭に観察できる。79から92は丸瓦片である。いずれも破片資料で全体形を知れない。凸面にタタキ目が、凹面には布目痕跡と板状模骨痕跡が認められる。側縁は、タテケズリによって丁寧に整形されており、分割破面が残っているものはない。93から129は平瓦片である。全体形を知ることのできる資料はないが、126は左右幅を知ることができる。左右幅は27cmである。凸面にタタキ痕跡が、凹面には布目痕跡と板状模骨痕跡が認められる。模骨幅は概して丸瓦のものより広い傾向にある。側縁は丸瓦同様、丁寧にタテケズリされており、分割破面が残されているものはない。

第27図から第29図は西側溝出土遺物である。130から132は須恵器で、130が瓶、131が甌、132が壺である。131の注口部分は先端に向かって開く形状である。133から142は土師器である。133は皿でやや厚い底部から口縁部へは外反しており、口縁端部は丸くおさめられている。134から141は壺で、北側溝から出土した壺同様、底部内面がほぼ平らで、底部と体部の接合部が膨らまないもの、底部内面がやや凹凸を持ち、底部と体部の接合部の厚みが増しているもの、底部内面が丸みを帯び、底部と体部の接合部の厚みが増しているものがある。体部から口縁部にかけての形状も、直線的に立ち上がるるもの、わずかに外反するものが見られる。内外面に煤が付着しており、灯明皿として使用されていたと思われるものがある。143はフイゴ羽口である。強く被熱しており、発泡している部分がある。144は丸瓦片である。全体形は知れないが、凸面に格子目タタキ痕、凹面に模骨と布目の痕跡が認められる。側縁部は丁寧にタテケズリされている。145から168は平瓦片である。凸面にタタキ目が、凹面には布目痕跡と板状模骨痕跡が認められる。側縁は丁寧にタテケズリが施されており、分割破面は残されていない。

169、170は堀立柱建物2出土石器である。169は砂岩製で全体的に被熱していることや鉄分と思しき物が付着していることから金床石の可能性がある。170は凝灰岩片で上端を欠損しており、直方体に近い形態であったと考えられるが、詳細不明である。複数の面に擦痕が認められる。

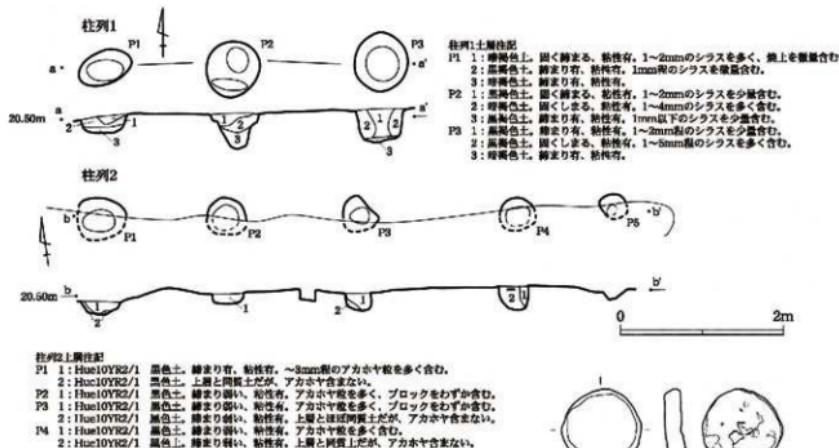
第30図から第34図は柱堀方出土遺物である。171から179は丸瓦片である。いずれも破片資料で全体形を知れない。凸面にタタキ痕跡が、凹面には布目痕跡と板状模骨痕跡が認められる。側縁は、タテケズリによって丁寧に整形されている。180から222は平瓦片である。全体形を知れるものはない。凸面にはタタキ目痕が、凹面には布目と模骨痕跡が認められる。

本遺構から出土した遺物の年代は、8世紀前半から9世紀後半に位置づけられるものが存在する。遺物の状況をみると、もっとも主体的なものは、数量的にも多く、かつ、完形に近い状態で検出されている土師器の壺であり、これらは、9世紀後半に位置づけられる。須恵器のうち、数点がやや古い様相を示すが、いずれも小片であり、点数も少ない。したがって、本遺構の年代は、9世紀後半に位置づけられる。

柱列

柱列1（第35図）

遺構 堀立柱建物1の西側で検出された。3つの柱堀方からなっていて、堀立柱建物の可能性もあるが、現状で1列の柱堀方列である。堀方の形状は円形で直径が65cm、検出面からの深さは25~43cm各柱間間隔は約165cmである。中央の柱堀方は、柱を回転させて抜取ったような痕

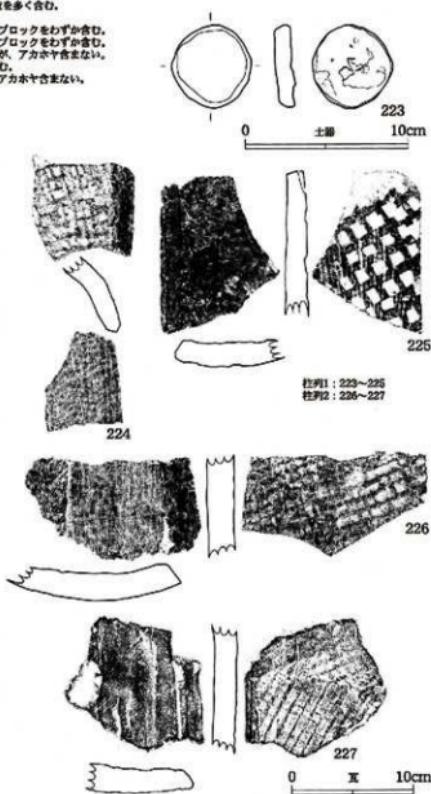


跡が認められる。本遺構は、堀立柱建物1の梁行と直交しており、堀立柱建物1の西辺に取り付くようにも見えるが判然としない。

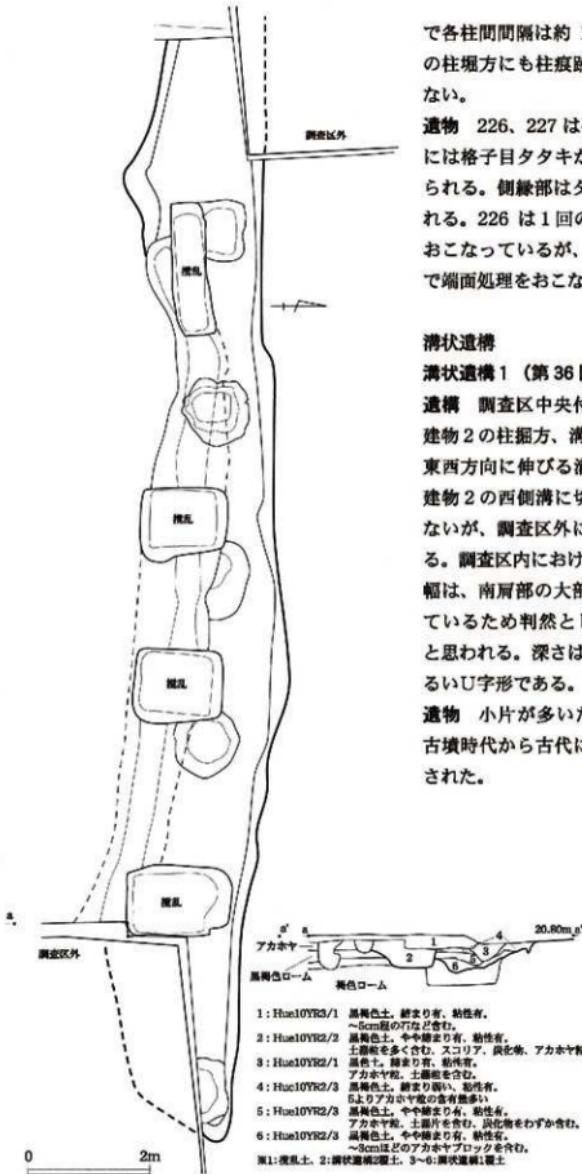
遺物 223 は不明土製品である。土師器坏底部を円形に打ち欠いたもので、直径約4.5cmである。224は丸瓦である。凸面に格子目タタキが施されている。凹面には布目痕が認められる。側縁はタテケズリによって丁寧に整形されている。225は平瓦である。凸面には格子目タタキが、凹面には布目痕が認められる。側縁部はタテケズリにより丁寧に整形されている。

柱列2 (第35図)

遺構 調査区中央付近で検出された。4つの柱壠方からなっていて、身舎を形成するために対になる柱壠方列は認められない。壠あるいは柵列かと思われるが、上部構造が不明なためいずれであるかの判断はできない。柱壠方の形状は円形で、直径が30~50cm、検出面からの深さは14~30cm



第35図 柱列1・2、同出土遺物



第36図 滑状構造 1

で各柱間間隔は約 1.6~1.9mである。いずれの柱壇方にも柱痕跡や抜取り痕跡は認められない。

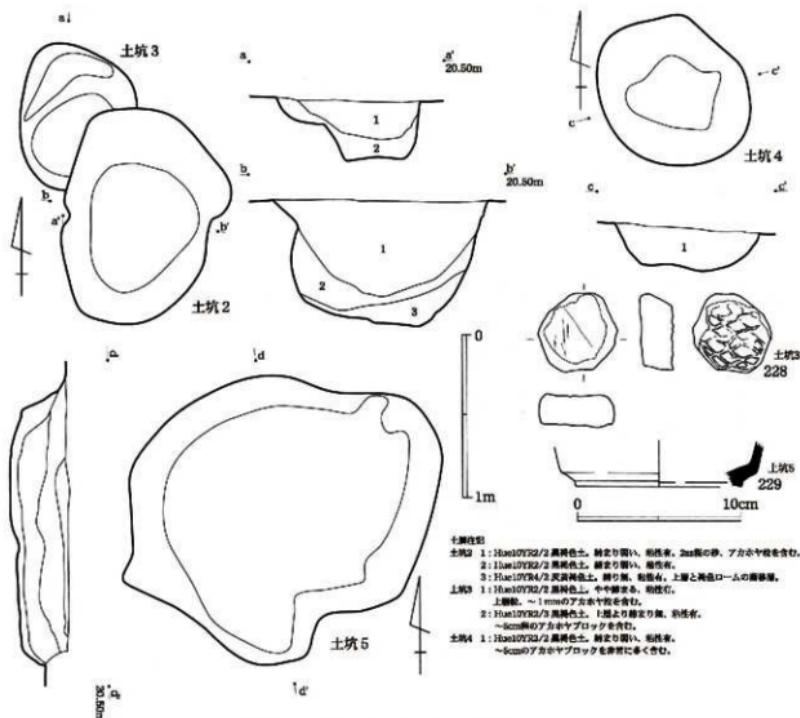
遺物 226、227 は平瓦である。いずれも凸面には格子目タタキが、凹面には布痕跡が認められる。側縁部はタテケズリによって整形される。226 は 1 回のタテケズリで端面処理をおこなっているが、227 は 2 回のタテケズリで端面処理をおこなっている。

清狀遺稿

遺状遺機 1 (第 36 図)

遺構 調査区中央付近で検出された。掘立柱建物 2 の柱掘方、溝状遺構 2 に切られている。東西方向に伸びる溝状遺構で、西端は掘立柱建物 2 の西側溝に切られているため判然としないが、調査区外に延びているものと思われる。調査区内における検出長は約 18m である。幅は、南肩部の大部分を溝状遺構 2 に切られているため判然としないが、1.8~1.9m 程度と思われる。深さは約 0.5m で、断面形態はゆるい U 字形である。

遺物 小片が多いために図示していないが、古墳時代から古代にかけての土師器片が検出された。



第37図 土坑2・3・4・5、同出土遺物

土坑**土坑2（第37図）**

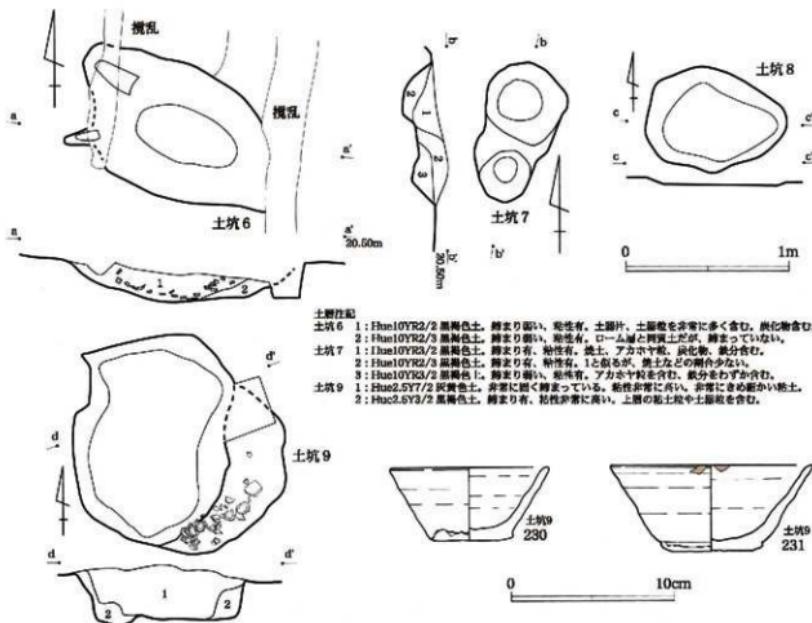
遺構 調査区東側で検出された。南北に長い不整楕円形の土坑である。長さ 130 cm、幅 90 cm、深さ 76 cm である。底面はほぼ平坦で、壁面はまっすぐに立ち上がり、断面形態はU字形である。

遺物 図示していないが、古代の土師器小片が出土した。

土坑3（第37図）

遺構 調査区東側で検出された。土坑南東部分は土坑2に削平されている。概ね円形の土坑で、直径は約 90 cm、深さ 37 cm である。土坑北側がテラス状になっている。底面はほぼ平坦で壁面はまっすぐに立ち上がっており、断面の形態はU字形である。

遺物 228 は不明土製品である。古代瓦片を円形に打ち欠いて作られており、格子目タタキ、布目痕跡が認められる。用途は不明である。



第38図 土坑6・7・8・9、同出土遺物

土坑4（第37図）

遺構 調査区東側で検出された。概ね円形の土坑で、直径は約100cm、深さ26cmである。底面は丸みがあり、壁面への傾斜変換も緩やかで、断面形態は楕形である。

遺物 図示していないが、古代の土師器小片が検出された。

土坑5（第37図）

遺構 調査区南東隅で検出された。不整形の土坑で、長さ193cm、幅178cm、深さ37cmである。底面から壁面にかけての傾斜変換は緩やかで断面形態は楕形である。

遺物 229は須恵器の高台付壺である。底部付近の破片で低く、四角形の高台が取り付けられている。小片のため、全体形が知れないが台形状の壺部形状であると思われる。形態から8世紀前葉に位置づけられる。

土坑6（第38図）

遺構 調査区中央付近で検出された。梢円形の土坑で、西端に2箇所突出している部分がある。

長さ 141 cm、幅 82 cm、深さ 26 cm である。底面から壁面にかけての傾斜変換は非常に緩やかで、断面形態は楕円形である。下記のような遺物出土状況から、土師器片廻棄用の土坑と思われる。

遺物 土坑底面形状に沿うように多量の土師器片が出土した。器形が分かることは存在しないが、壺が大部分を占めている。

土坑 7 (第37図)

遺構 調査区中央付近で検出された。南北に長い不整形の土坑で、2つのピットが連結したような形態である。長さ 86 cm、幅 48 cm、深さ 29 cm である。

遺物 小片のため図示していないが、古代の土師器片が出土した。

土坑 8 (第37図)

遺構 調査区中央付近で検出した。東西に長い不整椭円形の土坑である。長さ、88 cm、幅 65 cm、深さ 3 cm である。

遺物 小片のため図示していないが、古代の土師器片が出土した。

土坑 9 (第37図)

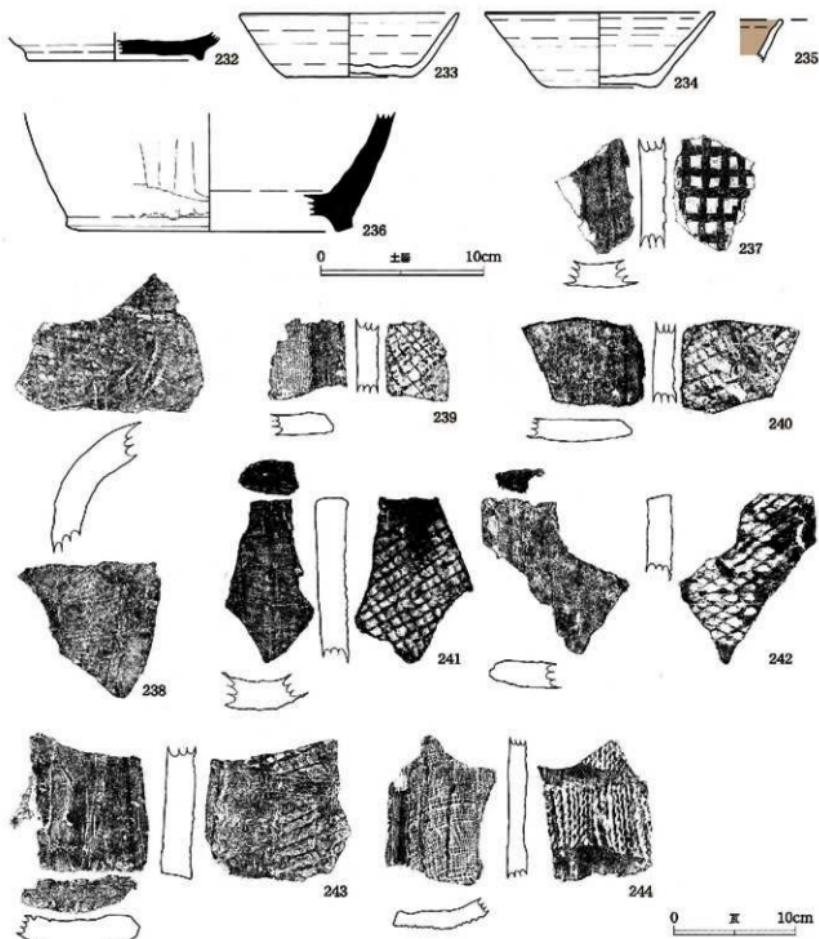
遺構 調査区中央付近で検出した。南北にやや長い不整椭円形の土坑で、底面から側壁へは急に立ち上がり、断面は逆台形状である。長さ 130 cm、幅 100 cm、深さ 40 cm である。土坑には非常に良質の白色粘土が充填されていた(図版 10)。したがって、本土坑はこの白色粘土を貯蔵する目的で掘削されたものと考えられる。土坑東側にはテラス状になっている部分があり、当該部分から土師器の壺が多く検出された。粘土貯蔵穴という本遺構の性格と合わせて注目できる。

遺物 上述のように土坑東側のテラス部分から土師器が多く検出された。230、231 は土師器壺である。壺部形状はやや丸みを帯びており、体部は外方へ直線的に立ち上がっている。円盤高台状の底部で、粘土のたまりが見られる。9世紀後半に位置づけられよう。

ピット出土遺物 (第39図)

調査区内では、多数のピットが検出された。それに伴って、古代に位置づけられる土師器、須恵器、瓦片など多くの遺物が出土した。それら遺物の中から、主要なものについて第39図に図示している。

232 は須恵器の高台付壺の底部片である。四角形で低い高台が取り付けられている。8世紀前半に位置づけられる。233、234 は土師器壺である。底部内面が平坦で、体部は外方へ向かって直線的に立ち上がっている。235 は内面黒色土器である。口縁端部がわずかにつまみだされて外反している。回転ナデ調整が施されており、内面は横方向に緻密なミガキが施されている。小片で判然としないが、口縁部形態から9世紀後半のものと思われる。236 は須恵器壺である。底部付近の破片で全体形を知れない。外へ開く四角形の高台が取り付けられている。高台と体部の接合部には、接合のために粘土を玉状に丸めたものが押し込むように貼り付けられている。胎土や製作技法から佐土原町下村窯跡産と思われる。形態から、9世紀前葉に位置づけられる。238 は



第39図 ピット出土遺物

丸瓦片である。風化のため不明瞭ではあるが凸面に格子目タタキが認められる。凹面には布目痕跡が認められる。237、239～244は平瓦片である。瓦凹面には、タタキ目が認められ、正方形、菱形の格子目タタキ、瓦側縁に対して平行方向で目の粗い縄目タタキがある。凹面には、それぞれ布目痕跡が認められる。側縁部はいずれも丁寧にタテケズリが施されており、分割破面を観察できるものは存在しない。

第4節 古代以降の遺構と遺物

溝状遺構

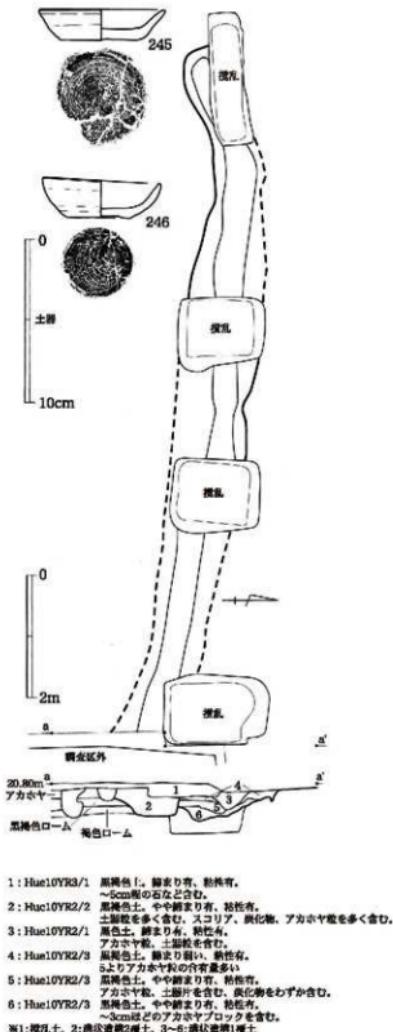
溝状遺構2(第40図)

遺構 掘立柱建物2、溝状遺構1と切り合って検出された。東西方向に伸びる溝状遺構で溝状遺構1と軸方向がほぼ重なっている。溝の東端部は調査区外にまで及んでいるため全体の長さはわからない。調査区内での計測値は、長さ11.3m、幅約1.2m、深さ約0.5m、断面の形態はおむねU字形である。遺物 245、246は土師器皿である。糸切底の皿で、底面に糸切痕跡が明瞭に残っている。両者とも内面の一部に煤が付着していることから、灯明皿として使用されていたと考えられる。

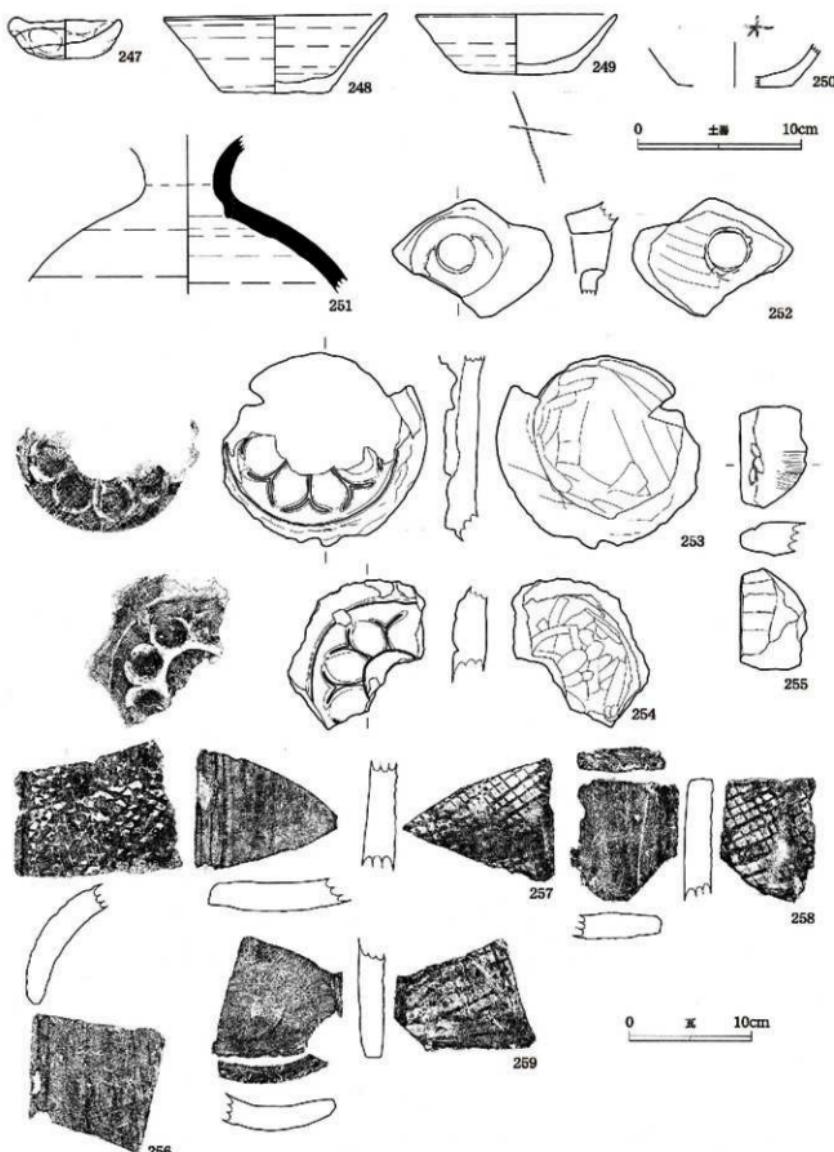
第5節 遺構外出土遺物(第41図)

調査中、遺構外から多くの遺物が出土、あるいは表探された。これらの中で主要なものについて図示する。247は土師器の小皿である。整形がかなり粗雑で、粘土を輪積みにして手捏ねで成形した痕跡が明瞭に観察できる。248から250は土師器の壊である。248、249は底部と体部の接合部分の形状や体部から口縁部にかけてわずかに外反している特徴から、9世紀前半に位置づけられる。250は底部内面が丸底化しており、248、249にくらべて作りもやや粗雑である。底部外面にヘラ書きが認められる。9世紀後半から10世紀に位置づけられようか。

251は須恵器壺である。頸部付近の破片で、内外面ともに横ナデが施されている。胎土の特徴から佐土原町下村窯跡群と思われる。内面には頸部と肩部の接合痕跡が認められる。当該部分の形状が、下村編年4期の長胴壺の形態に類似することから9世紀中ごろに位置づけられる。252は不明土製品で



第40図 溝状遺構2、同出土遺物



第41図 遺構外出土遺物

ある。中心に円形の孔がある。調整は内面にナデが認められるが、外面は風化のため不明である。

253～255は軒丸瓦片である。253、254は瓦当面の破片で、いずれも文様全体形を知ることはできないが、残存部分から素弁八葉蓮華文であると判断できる。両者とも、掘立柱建物2北側溝出土の軒丸瓦と同じく、瓦当面と裏面に直立線状になっていたものと思われるが、剥離、折損しており残存していない。253は瓦当面に范の木目痕跡と思われる筋状の圧痕が認められる。瓦当裏面は両者ともナデによる調整が施されている。掘立柱建物2北側溝出土軒丸瓦とこの両者は花弁形状やその配置の一致から同范関係にあるものと判断される。255は丸瓦が瓦當に接合される部分の破片であり、丸瓦先端部は楔状にカットされている。凸面は丁寧にハケで調整され、接合部付近にヘラ状工具の痕跡が認められる。256は丸瓦片である。凸面には格子目タタキが施され、凹面には布目痕跡が認められる。側縁は丁寧にタテケズリされている。257から259は平瓦片である。凸面には格子目タタキが施され、凹面には布目痕跡が認められる。側縁はタテケズリによって丁寧に調整されており、分割破面が残るものはない。

第1表 出土石器観察表

番号	出土位置	石材	器種	法量(cm, g)				備考
				長さ	幅	厚さ	重量	
258-8	SA1カマド	凝灰岩	カマド支脚	13.1	9.5	9.3	175.0	
258-9	SA1カマド	凝灰岩	カマド支脚	6.0	3.5	5.8	25.0	
258-10	SA1	砂岩	鐵石	13.1	6.6	4.6	525.0	
258-11	SA1	砂岩	鐵石	12.4	11.1	5.2	990.0	
258-12	SA1	砂岩	台石	31.2	18.6	11.5	9000.0	
258-17	SA2	砂岩	砥石	24.0	9.7	7.2	2600.0	
258-18	SA2	花崗岩	金珠石	23.2	14.9	7.1	2600.0	
258-169	SB2北側溝	砂岩	金珠石?	15.8	8.7	5.5	795.0	全体に風化あり
258-170	SB2北側溝	凝灰岩	不明	11.9	9.7	8.4	910.0	

第2表 出土土器観察表(1)

番号	出土位置	種別	器種	部位	基盤(cm)		調査		出土
					口径	底径	盤高	内面	
国7-1	SA1カマド	土師器	碗	口縁～底部	14.4	-	6.8	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ ~4mmの砂礫を含む
国7-2	SA1カマド	土師器	碗	口縁～底部	13.4	-	6.3	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ ~3mmの砂礫を含む
国7-3	SA1カマド	土師器	高杯	口縁～受部	(22.4)	-	-	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ ~3mmの砂礫を多く含む
国7-4	SA1カマド	土師器	甕	口縁～胴部	(18.9)	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ ~2mmの砂礫を多く含む
国7-5	SA1カマド	土師器	甕	口縁～胴部	(13.0)	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ ~5mmの砂礫を多量に含む
国7-6	SA1	土師器	甕	口縁～肩部	(11.7)	-	-	指オサエ・ヨコナデ	ナデ ~1mmの砂を多く含む
国7-7	SA1	土師器	甕	肩部～胴部	-	-	-	指オサエ・ナデ	ナデ ~1mmの砂を多く含む
国9-13	SA2	土師器	高杯	口縁～脚部	17.0	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ ~2mmの砂礫を多く含む
国9-14	SA2	土師器	高杯	口縁～底部	(21.4)	(16.7)	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ ~3mmの砂礫を多量に含む
国9-15	SA2	土師器	高杯	口縁～受部	(27.9)	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ ~2mmの砂を多量に含む
国9-16	SA2	土師器	高杯	脚部	-	(16.2)	-	ナデ	ナデ ~3mmの砂礫を少く含む
国18-22	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	11.0	6.1	4.5	回転ナデ	回転ナデ ~5mmの砂礫を含む
国18-23	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	13.1	5.6	4.8	回転ナデ	回転ナデ ~1mmの砂を多く含む
国18-24	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	11.7	6.3	4.0	回転ナデ	回転ナデ ~4mmの砂礫を含む
国18-25	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	10.5	5.6	4.1	回転ナデ	回転ナデ ~1mm程度の砂を少く含む
国18-26	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	(11.0)	6.2	4.4	回転ナデ	回転ナデ ~3mmの砂礫を含む
国18-27	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	(12.0)	(7.0)	3.7	回転ナデ	回転ナデ ~2mmの砂を少く含む
国18-28	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	13.4	3.3	4.6	回転ナデ	回転ナデ 1mmの砂を含む
国18-29	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	(13.3)	(4.0)	4.3	回転ナデ	回転ナデ ~1mmの砂を多く含む
国18-30	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	(12.4)	(5.6)	(4.0)	回転ナデ	回転ナデ 1mm以下の砂を多く含む
国18-31	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	13.4	6.9	4.1	回転ナデ	回転ナデ ~1-3mmの砂礫を含む
国18-32	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	13.6	6.7	4.2	回転ナデ	回転ナデ 1mmの砂をわずかに含む
国18-33	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	13.3	5.7	4.1	回転ナデ	回転ナデ 2mm以下の砂礫を含む
国18-34	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	13.5	6.3	4.6	回転ナデ	回転ナデ ~1mmの砂をごくわずか含む
国18-35	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	(13.4)	7.3	4.3	回転ナデ	回転ナデ ~2mmの砂礫を含む
国18-36	SB2北塊	土師器	坪	脚部～底部	-	(6.2)	-	回転ナデ	回転ナデ 無細粒を含む
国18-37	SB2北塊	土師器	坪	脚部～底部	-	(6.5)	-	回転ナデ	回転ナデ ~1mmの砂を含む
国18-38	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	(11.2)	6.0	4.7	回転ナデ	回転ナデ ~3mmの砂を少く含む
国18-39	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	(11.4)	(6.0)	5.0	回転ナデ	回転ナデ ~1mmの砂を多く含む
国18-40	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	(12.0)	4.7	4.4	回転ナデ	回転ナデ ~4mmの砂礫を含む
国18-41	SB2北塊	土師器	坪	脚部～底部	-	3.7	-	回転ナデ	回転ナデ ~1mmの砂を多く含む
国18-42	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	13.3	3.0	5.5	回転ナデ	回転ナデ ~2mmの砂をわずか含む
国18-43	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	(12.1)	2.9	4.9	回転ナデ	回転ナデ ~2mmの砂を含む
国18-44	SB2北塊	土師器	坪	脚部～底部	-	(6.1)	-	回転ナデ	回転ナデ ~1mmの砂を含む
国18-45	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	(12.9)	3.1	4.9	回転ナデ	回転ナデ ~2mmの砂を多量に雜に含む
国18-46	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	(10.9)	4.4	3.9	回転ナデ	回転ナデ ~4mmの砂礫を少く含む
国18-47	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	(11.4)	3.6	4.3	回転ナデ	回転ナデ ~4mmの砂礫を少量含む
国18-48	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	(11.9)	(5.6)	4.0	回転ナデ	回転ナデ ~3mmの砂礫を含む
国18-49	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	(11.7)	4.0	4.3	回転ナデ	回転ナデ ~4mmの砂礫を少量含む
国18-50	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	13.2	6.9	4.5	回転ナデ	回転ナデ ~4mmの砂を含む、雜をごくわずか含む
国18-51	SB2北塊	土師器	坪	脚部～底部	-	(6.0)	-	回転ナデ	回転ナデ ~3mmの砂礫を多く含む
国18-52	SB2北塊	土師器	坪	脚部～底部	-	(8.8)	-	回転ナデ	回転ナデ ~1mmの砂を含む
国18-53	SB2北塊	土師器	坪	底部	-	(5.6)	-	回転ナデ	回転ナデ 1mm以下の砂、5-8mmの礫を含む
国18-54	SB2北塊	土師器	坪	底部	-	7.3	-	回転ナデ	回転ナデ ~2mm程度の砂を含む
国18-55	SB2北塊	土師器	坪	底部	-	7.4	-	回転ナデ	回転ナデ ~1-5mmの砂を多量に含む
国18-56	SB2北塊	土師器	坪	底部	-	7.7	-	回転ナデ	回転ナデ ~3mmの砂を多く含む
国18-57	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	(14.9)	7.5	4.8	回転ナデ	回転ナデ ~1mm以下の砂をわずかに含む
国18-58	SB2北塊	土師器	坪	脚部～底部	-	(8.6)	-	回転ナデ	回転ナデ ~2mmの砂礫を多く含む
国18-59	SB2北塊	土師器	坪	脚部～底部	-	6.5	-	回転ナデ	回転ナデ ~3mmの砂礫を含む
国18-60	SB2北塊	土師器	坪	口縁～底部	(14.0)	7.2	4.6	回転ナデ	回転ナデ ~1.5mmの砂を多量に含む

第3表 出出土器観察表（2）

番号	出土位置	種別	器種	部位	寸法(cm)			調査		出土
					口径	底径	高さ	内面	外面	
国18-61	SB2北構	土師器	坪	底部	—	(9.4)	—	回転ナデ	回転ナデ	~2mmの砂を含む
国18-62	SB2北構	土師器	坪	底部	—	8.5	—	回転ナデ	回転ナデ	~3mm砂を多く、織を少量含む
国18-63	SB2北構	土師器	施塗土器	口縁～胴部	(12.0)	—	—	布痕跡	指オサエ	~13mmの砂織を多く含む
国18-64	SB2北構	土師器	施塗土器	口縁～胴部	(13.0)	—	—	布痕跡	指オサエ	~9mmの砂織を多く含む
国19-65	SB2北構	灰瓦器	坪壠	受部	(14.6)	—	—	ヨコナデ	ヘラタツリ・ヨコナデ	~1.5mmの砂織を含む
国19-66	SB2北構	灰瓦器	坪壠	受部～天井部	(19.9)	—	—	ヨコナデ・仕上げナデ	ヘラタツリ・ヨコナデ	1mm以下の砂を多く含む
国19-67	SB2北構	灰瓦器	坪	口縁～底部	(16.3)	11.1	5.2	回転ナデ	回転ナデ	2mm大の織を少量、1mm大の砂を含む
国19-68	SB2北構	灰瓦器	坪	口縁～底部	(14.5)	(9.5)	4.1	回転ナデ	回転ナデ	~1mmの砂を含む
国19-69	SB2北構	灰瓦器	坪	桐部～底部	—	(6.8)	—	回転ナデ	回転ナデ	~2mmの砂を含む
国19-70	SB2北構	灰瓦器	甕	底部	—	—	—	回転ナデ・当具痕	回転ナデ・タキナデ	1mm以下の微細粒をわずか含む
国19-71	SB2北構	灰瓦器	甕	桐部	—	—	—	当具痕	タキ日	~3mmの砂織を少量含む
国19-72	SB2北構	土師器	坪	口縁～底部	(13.4)	(8.7)	2.1	回転ナデ	回転ナデ	~2mmの砂織を含む
国19-73	SB2北構	土師器	?	口縁～胴部	(10.4)	—	—	回転ナデ	回転ナデ	微細粒を少量含む
国19-74	SB2北構	土師器	?	底部	—	(11.2)	—	ナデ	ナデ	~1mmの砂を多く含む
国19-75	SB2北構	土師器	ワイヤ	先端部	—	—	—	?	スノロ状痕跡	~4mmの砂織を含む
国19-76	SB2北構	土師器	甕	底部・胴部	—	(27.7)	—	当具痕・回転ナデ	タキ日・回転ナデ	~6mmの砂織を多量に含む
国27-130	SB2西構	灰瓦器	瓶	口縁部	4.8	—	—	回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の砂を含む
国27-131	SB2西構	灰瓦器	甕	口縁～胴部	(6.8)	—	—	回転ナデ	回転ナデ	微細な粒をわずかに含む
国27-132	SB2西構	灰瓦器	?	底部～胴部	—	(5.2)	—	回転ナデ	回転ナデ	~1.5mmの砂を含む
国27-133	SB2西構	土師器	甕	口縁～底部	(13.2)	(9.3)	1.7	回転ナデ	回転ナデ	微細な砂を含む
国27-134	SB2西構	土師器	坪	口縁～底部	(13.5)	8.7	5.0	回転ナデ	回転ナデ	微細な砂を多量に、3mmの大織を中量含む
国27-135	SB2西構	土師器	?	口縁～底部	(12.4)	6.0	4.2	回転ナデ	回転ナデ	~2.5mmの砂を多量に、砂織を少量含む
国27-136	SB2西構	土師器	坪	口縁～底部	(11.8)	(3.2)	4.2	回転ナデ	回転ナデ	~1.5mmの砂を少量含む
国27-137	SB2西構	土師器	坪	口縁～底部	(13.0)	(6.8)	5.2	回転ナデ	回転ナデ	~1mmの砂を多量に含む
国27-138	SB2西構	土師器	坪	口縁～底部	12.1	4.1	4.6	回転ナデ	回転ナデ	~2.5mmの砂を多く含む
国27-139	SB2西構	土師器	?	口縁～底部	(13.0)	2.9	4.8	回転ナデ	回転ナデ	~1mmの砂を含む
国27-140	SB2西構	土師器	?	口縁～底部	(13.6)	(5.3)	4.5	回転ナデ	回転ナデ	~3mmの砂を多量に織を少量含む
国27-141	SB2西構	土師器	?	口縁～底部	13.1	3.4	4.6	回転ナデ	回転ナデ	~1.5mmの砂を多量に含む
国27-142	SB2西構	土師器	甕	底部	—	5.8	—	ナデ	ハケ・ナデ	1~3mmの砂織を非常に多く含む
国27-143	SB2西構	土師器	ワイヤ	先端部	—	—	—	ナデ	スノロ状痕跡	1~3mmの砂織を少量、1mm以下の粒を多く含む
国35-223	柱判I	土師器	不明	定形	長さ	幅	厚さ	上面	下面	~2mmの砂を多く含む
国37-228	土坑3	—	円盤	定形	長さ	幅	厚さ	上面	下面	~4mmの砂織を多く含む
国37-229	土坑5	灰瓦器	坪	桐部～底部	—	(10.2)	—	回転ナデ	回転ナデ	~1mmの砂を含む
国38-230	土坑9	土師器	?	口縁～底部	(12.4)	(6.0)	5.3	回転ナデ	回転ナデ	~2mmの砂を多量に含む
国38-231	土坑9	土師器	?	口縁～底部	(9.5)	(4.8)	4.5	回転ナデ	回転ナデ	~2mmの砂を多く含む
国39-232	ビット	灰瓦器	?	底部	—	(10.9)	—	仕上げナデ	回転ナデ	微細な砂を含む
国39-233	ビット	土師器	?	口縁～底部	13.4	7.8	3.9	回転ナデ	回転ナデ	~1mmの砂を多量に含む
国39-234	ビット	土師器	坪	口縁～底部	14.1	6.6	4.6	回転ナデ	回転ナデ	~1.5mmの砂を多量に含む
国39-235	ビット	土師器	黒色土器	口縁部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	微細な砂を多く含む
国39-236	ビット	灰瓦器	?	底部	(15.6)	—	—	ヨコナデ	ナデ	~1mmの砂をごくわずか含む
国40-245	中世構	土師器	?	口縁～底部	7.7	4.5	1.9	回転ナデ	回転ナデ	微細な粒を多量に含む
国40-246	中世構	土師器	?	口縁～底部	7.0	3.8	2.3	回転ナデ	回転ナデ	1mm大の砂を少量含む
国41-247	規丸	土師器	?	口縁～底部	6.1	2.6	2.4	指オサエ	指オサエ	微細な粒を少量含む
国41-248	表探	土師器	坪	口縁～底部	13.7	(6.4)	4.8	回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の砂を多量に含む
国41-249	規丸	土師器	坪	口縁～底部	(12.3)	(6.7)	3.7	回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の砂を含むを含む
国41-250	規丸	土師器	?	底部～胴部	—	(7.1)	—	回転ナデ	回転ナデ	微細な粒を含む
国41-251	表探	灰瓦器	甕	底部付近	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	1~3mmの砂織を含む
国41-252	表探	土師器	不明無品	?	—	—	—	ナデ	ナデ	2mm程度の織を多く含む

第4表 出土瓦観察表（1）

番号	出土位置	種別	タキ目	番目	陶器表面			紹士	備考
					1回	2回	以上		
國12-19	SBE	平瓦	方形格子目 I	6	-	-	-	2mm以下の砂を少量含む	
國19-20	SBE	平瓦	菱形格子目 II	7	-	-	-	2mm以下の砂を多量に、3mm以上の繊を少量含む	
國13-21	SBE	平瓦	菱形格子目 I	13	○	-	-	2mmの砂を含む	
國20-77	SBE北側	平瓦	方形格子目 I	-	-	-	-	2~4mmの繊を中量、1mm以下の砂を多く含む	
國20-78	SBE北側	軒丸瓦	-	-	-	-	-	0.5mm程の砂を多く含む	系切瓶
國20-79	SBE北側	丸瓦	方形格子目 I	??	○	-	-	1mmの砂を含む	瓦当外縁部分
國20-80	SBE北側	丸瓦	方形格子目 II	10	-	-	-	2~3mmの砂を含む	
國20-81	SBE北側	丸瓦	方形格子目 III	6	○	-	-	1~1.5mmの砂を多く含む	
國20-82	SBE北側	丸瓦	方形格子目 II	7	○	-	-	繊維的な砂を多く含む	
國21-83	SBE北側	丸瓦	方形格子目 III	10	○	-	-	2mmの砂を多く含む	
國21-94	SBE北側	丸瓦	菱形格子目 I	14	-	-	-	繊維的な砂が多く、3mm大の繊がわずか含まれる	系切瓶
國21-95	SBE北側	丸瓦	菱形格子目 II	9	-	-	-	1mm以下の砂を多量に含まれる	
國21-96	SBE北側	丸瓦	菱形格子目 III	8	○	-	-	3mmの砂を含む	
國21-97	SBE北側	ナマ酒消し	-	10	○	-	-	2~3mmの砂を含む	
國21-98	SBE北側	丸瓦	菱形格子目 III	11	-	-	-	2~3mmの砂を含む	
國21-99	SBE北側	丸瓦	菱形格子目 II	11	○	-	-	2~3mmの砂を含む	粘土継目
國21-101	SBE北側	丸瓦	菱形格子目 III	12	○	-	-	1mmの砂を含み、繊1mm大の繊を少量含む	画面広端部ケズリ
國21-102	SBE北側	平瓦	方形格子目 I	10	-	-	-	1mmの砂を含む	
國22-93	SBE北側	平瓦	方形格子目 II	7	-	-	-	2mmの砂を多く含む	
國22-94	SBE北側	平瓦	方形格子目 I	9	○	-	-	5mmの砂を含む	粘土継目
國22-95	SBE北側	平瓦	方形格子目 II	8	○	-	-	2mmの砂を多量に、3mm以上の繊わずか含む	
國22-96	SBE北側	平瓦	方形格子目 I	7	○	-	-	1~4mmの砂を多く含む	系切瓶
國22-97	SBE北側	平瓦	方形格子目 III	6	○	-	-	2mmの砂を少量含む	
國22-98	SBE北側	平瓦	方形格子目 II	10	-	-	-	2mmの砂を含む	
國22-99	SBE北側	平瓦	方形格子目 III	10	○	-	-	1mmの砂を含む	
國22-100	SBE北側	平瓦	方形格子目 II	8	○	-	-	2mmの砂を含む	分割瓶底
國22-101	SBE北側	平瓦	方形格子目 III	10	○	-	-	2mmの砂を含む	
國22-102	SBE北側	平瓦	方形格子目 II	10	○	-	-	2mmの砂を含む	
國22-103	SBE北側	平瓦	方形格子目 III	9	○	-	-	3mmの砂多く、繊を少量含む	
國23-104	SBE北側	平瓦	方形格子目 II	10	-	-	-	2mmの砂を含む	
國23-105	SBE北側	平瓦	方形格子目 III	8	○	-	-	2mmの砂を含む	
國23-106	SBE北側	平瓦	方形格子目 II	12	-	-	-	4mmの砂を多量に含む	布端直跡
國23-107	SBE北側	平瓦	方形格子目 III	11	-	-	-	5mmの砂を含む、繊を少量含む	
國23-108	SBE北側	平瓦	方形格子目 II	6	-	-	-	1mmの砂を含む	
國23-109	SBE北側	平瓦	方形格子目 III	13	○	-	-	2mmの砂を含む	
國23-110	SBE北側	平瓦	方形格子目 II	9	○	-	-	2mmの砂を含む	分割瓶底 風化
國23-111	SBE北側	平瓦	方形格子目 III	7	-	-	-	3mmの砂を多く含む	
國24-112	SBE北側	平瓦	方形格子目 II	10	○	-	-	2mmの砂を多量に、3mm程の繊を少量含む	
國24-113	SBE北側	平瓦	方形格子目 III	10	○	-	-	3mmの砂を多く含む	布端直跡
國24-114	SBE北側	平瓦	方形格子目 II	7	-	-	-	1mmの砂を含む	粘土継目
國24-115	SBE北側	平瓦	方形格子目 III	6	○	-	-	1mmの砂を含む	
國24-116	SBE北側	平瓦	方形格子目 II	7	○	-	-	1mmの砂を含む	
國25-107	SBE北側	平瓦	菱形格子目 I	14	-	-	-	1~1.5mmの砂を多く含む	朱文様 (右面)
國25-118	SBE北側	平瓦	菱形格子目 II	14	-	-	-	2mmの砂を少く含む	系切瓶底
國25-119	SBE北側	平瓦	菱形格子目 III	14	○	-	-	2mmの砂を多く含む	画面風化
國25-120	SBE北側	平瓦	菱形格子目 II	15	-	-	-	2mmの砂を含む	
國25-121	SBE北側	平瓦	菱形格子目 III	12	○	-	-	3mmの砂を含む	
國25-122	SBE北側	平瓦	菱形格子目 II	14	○	-	-	1mmの砂を含む	
國25-123	SBE北側	平瓦	菱形格子目 III	11	-	-	-	4mmの砂を含む	布端直跡
國25-124	SBE北側	平瓦	菱形格子目 II	6	-	-	-	1mmの砂を含む	
國25-125	SBE北側	平瓦	菱形格子目 III	9	○	-	-	1~1.5mmの砂を多く含む	
國25-126	SBE北側	平瓦	菱形格子目 II	9	○	-	-	2mmの砂を少く含む	
國26-127	SBE北側	平瓦	長方形格子目	8	-	-	-	1mmの砂を含む、3mm大の繊をやや多く含む	
國26-128	SBE北側	平瓦	ナマ酒消し	12	-	-	-	~9mmの砂を含む	粘土継目
國26-129	SBE北側	平瓦	ナマ酒消し	10	-	-	-	1~3mmの砂を含む	画面風化
國27-144	SBE西側	丸瓦	菱形格子目 II	9	○	-	-	2mm程の砂を含む	
國27-145	SBE西側	平瓦	方形格子目 II	6	○	-	-	3mmの砂を多く含む	系切瓶底
國27-146	SBE西側	平瓦	方形格子目 II	7	○	-	-	1~2mmの砂を含む	系切瓶底
國27-147	SBE西側	平瓦	方形格子目 III	8	○	-	-	2mmの砂を含む	系切瓶底
國27-148	SBE西側	平瓦	方形格子目 II	7	○	-	-	1mmの砂を含む	分割瓶底？
國27-149	SBE西側	平瓦	方形格子目 III	7	-	-	-	1mmの砂を含む	画面広端部ケズリ
國27-150	SBE西側	平瓦	方形格子目 II	10	○	-	-	1mmの砂を含む	
國27-151	SBE西側	平瓦	方形格子目 III	10	○	-	-	2mmの砂を含む	
國28-152	SBE西側	平瓦	方形格子目 II	6	○	-	-	2mmの砂を含む	
國28-153	SBE西側	平瓦	方形格子目 III	9	○	-	-	1mmの砂を含む	
國28-154	SBE西側	平瓦	方形格子目 II	8	○	-	-	3mmの砂をわざわざに含む	
國28-155	SBE西側	平瓦	菱形格子目 I	?	○	-	-	繊維的な砂をわざわざに含む	
國28-156	SBE西側	平瓦	菱形格子目 II	12	○	-	-	3mmの砂を含む	
國28-157	SBE西側	平瓦	菱形格子目 III	8	-	-	-	4mmの砂を含む	
國28-158	SBE西側	平瓦	菱形格子目 II	7	-	-	-	2~3mmの砂を含む	
國28-159	SBE西側	平瓦	菱形格子目 III	9	-	-	-	5mm以下の砂を多く含む	
國28-160	SBE西側	平瓦	菱形格子目 II	13	○	-	-	6mmの砂を多く含む	
國29-161	SBE西側	平瓦	菱形格子目 III	14	○	-	-	1mmの砂を含む	
國29-162	SBE西側	平瓦	菱形格子目 II	12	○	-	-	~3mmの砂を含む	
國29-163	SBE西側	平瓦	菱形格子目 III	10	-	-	-	~3mmの砂を含む	

第5表 出土瓦類察表（2）

番号	出土位置	種別	タキ目	目	陶器地質			地質	備考
					1回	2回	以上		
国29-164	SBE西溝	平瓦	長方形格子目	10	○	-	-	~1mmの砂を含む	
国29-165	SBE西溝	平瓦	楕円	6	-	-	-	~2mmの砂を含む	
国29-166	SBE西溝	平瓦	ナデ酒し	?	-	-	-	~1mmの砂を含む	
国29-167	SBE西溝	平瓦	ナデ酒し	?	○	-	-	~1mmの砂を含む	
国29-168	SBE西溝	平瓦	ナデ酒し	11	○	-	-	~2mmの砂を含む	
国29-171	SBE往來	丸瓦	方形格子目Ⅰ	?	-	○	-	~2mmの砂を含む	
国29-172	SBE往來	丸瓦	方形格子目Ⅱ	12	○	-	-	1mmの大粒を少量、3mm大的繩をわずか含む	凸面広端部ケズリ、縫合?
国29-173	SBE往來	丸瓦	方形格子目Ⅲ	10	○	-	-	~1mmの砂を含む	
国29-174	SBE往來	丸瓦	方形格子目Ⅳ	12	○	-	-	~4mmの砂粒が多く含まれている	
国29-175	SBE往來	丸瓦	長方形格子目	9	○	-	-	~1mmの砂を含む	希少部
国29-176	SBE往來	丸瓦	ナデ酒し	?	-	○	-	~2mmの砂を含む	
国29-177	SBE往來	丸瓦	方形格子目Ⅴ	9	-	-	-	~2mmの砂を含む	
国29-178	SBE往來	丸瓦	方形格子目Ⅵ	10	○	-	-	1mm以下の粒がく、3mm大的繩を含む	
国29-179	SBE往來	丸瓦	方形格子目Ⅶ	10	○	-	-	1mm以下の粒がかなり多く含む	横骨タガ痕跡
国31-180	SBE往來	平瓦	長方形格子目Ⅰ	9	○	-	-	~1mmの砂を多く、2~3mmの繩を少量含む	
国31-181	SBE往來	平瓦	方形格子目Ⅱ	7	○	-	-	~1.5mmの砂を少し、~2mmの砂粒を多く含む	
国31-182	SBE往來	平瓦	方形格子目Ⅲ	8	○	-	-	~4mmの砂粒を多く含む	
国31-183	SBE往來	平瓦	方形格子目Ⅳ	9	○	-	-	~3mmの砂粒を多く含む	
国31-184	SBE往來	平瓦	方形格子目Ⅴ	?	-	-	-	3~4mmの砂粒を多く含む	希少部
国31-185	SBE往來	平瓦	方形格子目Ⅵ	8	○	-	-	~3mmの砂粒を含む	
国31-186	SBE往來	平瓦	方形格子目Ⅶ	9	-	-	-	~1mmの砂を多く含む	
国31-187	SBE往來	平瓦	方形格子目Ⅷ	10	-	-	-	1mm以下の砂を多く、2~3mmの繩を含む	
国31-188	SBE往來	平瓦	方形格子目Ⅸ	11	-	-	-	~2mmの砂粒を含む	
国31-189	SBE往來	平瓦	方形格子目Ⅹ	?	○	-	-	2mmの砂粒を含まれている	
国32-190	SBE往來	平瓦	方形格子目Ⅺ	?	-	-	-	~2mmの砂を含む	
国32-191	SBE往來	平瓦	方形格子目Ⅻ	8	-	-	-	1mm以下の砂粒を多く、2mm大的砂を含む	希少部
国32-192	SBE往來	平瓦	方形格子目Ⅼ	7	-	-	-	1mm以下の砂粒を多く含んでいる	希少部
国32-193	SBE往來	平瓦	方形格子目Ⅽ	7	○	-	-	~1.5mmの砂を多く含む	
国32-194	SBE往來	平瓦	方形格子目Ⅾ	10	-	-	-	1mmの砂を含む	被熱発泡
国32-195	SBE往來	平瓦	方形格子目Ⅿ	9	○	-	-	~2.5mmの砂を多く含む	
国32-196	SBE往來	平瓦	方形格子目ⅰ	9	-	-	-	~2mmの砂を含む	
国32-197	SBE往來	平瓦	方形格子目ⅱ	12	○	-	-	~2mmの砂を多く、3~5mm大的繩を含む	分割突起
国32-198	SBE往來	平瓦	方形格子目ⅲ	8	○	-	-	1mm以下の砂粒を多く含んでいる	
国32-199	SBE往來	平瓦	方形格子目ⅳ	13	○	-	-	1mm以下の砂粒を多く、2~3mmの繩を含む	
国32-200	SBE往來	平瓦	方形格子目ⅴ	6	○	-	-	1mm以下の砂を多く含む	
国32-201	SBE往來	平瓦	方形格子目ⅵ	9	-	-	-	~2.5mmの砂粒を多く含む	
国32-202	SBE往來	平瓦	方形格子目ⅶ	9	○	-	-	~2mmの砂を少し含む	
国32-203	SBE往來	平瓦	方形格子目ⅷ	9	-	-	-	~1.5mmの砂を含む	
国33-204	SBE往來	平瓦	方形格子目ⅸ	10	○	-	-	~2mmの砂を多く含む	骨土付着?
国33-205	SBE往來	平瓦	方形格子目ⅹ	10	-	-	-	~3mmの砂粒を多く含む	
国33-206	SBE往來	平瓦	方形格子目ⅾ	9	-	-	-	~5mmまでの砂を多くに繩を少量含む	
国33-207	SBE往來	平瓦	方形格子目Ⅿ	8	-	-	-	~1mmの砂を多く含む	希少部
国33-208	SBE往來	平瓦	方形格子目ⅰ	9	-	-	-	~4mmまでの砂を多くに繩を少量含む	
国33-209	SBE往來	平瓦	方形格子目ⅱ	10?	-	-	-	~3.5mmの砂粒を多く含む	
国33-210	SBE往來	平瓦	方形格子目ⅲ	7	○	-	-	1mm以下の砂粒を多く含む	
国33-211	SBE往來	平瓦	方形格子目ⅳ	7	○	-	-	繩雖然な砂を多く含む	分割範囲
国34-212	SBE往來	平瓦	菱形格子目Ⅰ	14	○	-	-	~3mmの砂を多く含む	
国34-213	SBE往來	平瓦	菱形格子目Ⅱ	14	-	-	-	~2mmの砂を多く含む	
国34-214	SBE往來	平瓦	菱形格子目Ⅲ	14	-	-	-	~3mmまでの砂を多く、繩を少量含む	
国34-215	SBE往來	平瓦	菱形格子目Ⅳ	14	-	-	-	~1~2mmの砂を少し、5mmの繩をわずか含む	粘土難日
国34-216	SBE往來	平瓦	菱形格子目Ⅴ	9	○	-	-	~1mmの砂を含む	
国34-217	SBE往來	平瓦	菱形格子目Ⅵ	?	○	-	-	~2mmの砂を多く含む	凸面広端部ケズリ、縫合?
国34-218	SBE往來	平瓦	ナデ酒し	?	○	-	-	1mm以下の砂粒を多く含む、繩を含む	面面風隙
国34-219	SBE往來	平瓦	ナデ酒し	8	○	-	-	1mm以下の砂を含む	
国34-220	SBE往來	平瓦	ナデ酒し	10	○	-	-	~4mmの砂粒を含む	
国34-221	SBE往來	平瓦	不明	10	-	-	-	1mm以下の砂粒を多く含んでいる	
国34-222	SBE往來	平瓦	不明	11	-	-	-	~5mmの砂粒を多く含む	
国35-224	柱例1	丸瓦	長方形格子目Ⅰ	10	○	-	-	~1mmの砂を含む	
国35-225	柱例1	平瓦	方形格子目Ⅰ	8	○	-	-	~3mmの砂粒を含む	
国35-226	柱例2	平瓦	方形格子目Ⅱ	10	○	-	-	1~2.5mmの砂粒を少量含む	
国35-227	柱例2	平瓦	方形格子目Ⅲ	10	○	-	-	~1mmの砂を少量含む	
国39-237	ピット	平瓦	方形格子目Ⅰ	8	-	-	-	~1~6mmの砂粒が多量に含まれる	
国39-238	ピット	丸瓦	不明	10	-	-	-	~2mmの砂粒を多く含む	
国39-239	ピット	平瓦	方形格子目Ⅱ	7	○	-	-	1mm以下の砂粒を多く含む	分割範囲
国39-240	ピット	平瓦	方形格子目Ⅲ	?	○	-	-	1mm以下の砂粒をかなり多く含む	
国39-241	ピット	平瓦	方形格子目Ⅳ	10	-	-	-	1mm以下の砂をわずかに含む	
国39-242	ピット	平瓦	方形格子目Ⅴ	15	○	-	-	1mm程の砂を多量に含む	
国39-243	ピット	平瓦	ナデ酒し	10	○	-	-	~1mmの砂少量、2mm大的砂多く含む	
国39-244	ピット	平瓦	調目	6	○	-	-	~1mmの砂を含む	
国41-251	黒色土	軒丸瓦	-	-	-	-	-	~3mmの砂粒を多く含む	
国41-254	表様	軒丸瓦	-	-	-	-	-	~4mmの砂粒をわずかに含む	
国41-255	匂瓦	軒丸瓦	ナデ酒し	?	-	-	-	~2mmの砂を含む	丸瓦・瓦当接合部分
国41-256	匂瓦	丸瓦	菱形格子目Ⅲ	12	○	-	-	~2mmの砂粒を含む	
国41-257	匂瓦	平瓦	方形格子目Ⅲ	10	○	-	-	1mmの砂を含む	分割範囲
国41-258	匂瓦	平瓦	方形格子目Ⅳ	11	○	-	-	~1mm程の砂を含む	田面広端部ケズリ、異端
国41-259	表様	平瓦	ナデ酒し	?	○	-	-	1mm以下の砂を含む	

第IV章 考察

第1節 瓦にかんして

本遺跡では小片を含め、軒丸瓦 5 点、平瓦・丸瓦あわせて約 1400 点もの瓦片が各遺構から出土、あるいは表面採集されている。いずれも瓦の全体形を知りうる資料は得られなかったが、各種の製作にかかる痕跡を観察できる。また、古代において瓦は官衙、寺院にのみ使用されたもので、それが当地で多数検出されたことの意義は、宮崎市の古代を考える上で非常に重要な意味を持つ。そこで、本節では本遺跡出土瓦について、製作技術や年代、系譜などについて若干の検討をおこないたい。

平瓦・丸瓦の製作技術

平瓦の製作方法にかんしてまず注目されるのが、粘土継目と糸切痕跡である。本遺跡出土の瓦で観察できる粘土継目は、いずれも瓦側縁に対して平行方向のものである（図版 16 1 段目左）。いくつかの瓦には粘土板切り出しのための糸切痕跡が認められる（図版 16 1 段目右）。また、すべての平瓦凹面には板状の模骨痕跡が確認できる。この板状の模骨痕跡は、丸瓦凹面にも確認でき（図版 16 2 段目左）、これら造瓦技術の系譜を考える上で重要である。模骨幅は概して丸瓦の方が幅狭な傾向にある。また、いずれの平瓦凹面にも布目痕跡が残されている。また、いくつかの平瓦凹面には粘土円筒の分割指標である分割裁線や分割突起の痕跡も確認できる（図版 16 2 段目右）。側縁のタテケズリ調整は丁寧で、分割破面が残されているものは確認できない。側縁タテケズリの回数は、1 回のもの、2 回のもの、それ以上の回数のものがある。

丸瓦にかんしても、平瓦同様に粘土継目や板状の模骨痕跡、凹面の布目痕跡などが確認できることから、同じ製作方法によって製作されていたと判断される。

以上の製作にかかる痕跡から、本遺跡出土の平瓦、丸瓦は粘土板を用いた桶巻き技法によつて製作されていたことが明らかである。現状において、一枚作りによって製作されたとみなされる資料は存在しない。

上記の製作にかかる痕跡には、それぞれ分類することが可能なものがある。それは、タタキ目の種類、布目の精粗、側縁タテケズリの回数である。これらのうち最も明瞭で、普遍的なものが凸面に残されたタタキ目である。したがって、以下では、タタキ目の分類を基準として、その他、製作痕跡について見ていくこととする。本遺跡で見られる平瓦、丸瓦凸面タタキ目の分類は以下の通りである（図版 15）。

【格子目タタキ】

方形格子目Ⅰ類：正方形の格子目で格子の目が大きいもの

方形格子目Ⅱ類：正方形の格子目で格子の目の細かいもの

菱形格子目Ⅰ類：菱形の格子目で格子の目が大きいもの

菱形格子目Ⅱ類：菱形の格子目で格子の目が細かいもの

長方形格子目：格子目が長方形のもの

【縄目タタキ】

縄目：瓦側縁に対して縦方向の縄目で粗いもの

【不明】

ナデ消しによってタタキ目が観察できないもの

風化により観察できないもの

ナデ消しについては、いずれかのタタキ目が施された後にナデ消されているもので、本来は他のタタキ目と同列に分類することは適切ではないが、現状でタタキ目を判断できないため、便宜上【不明】において。

この分類基準ごとに側縁タテケズリ回数、布目の精粗などの各要素をまとめたものが第6表である。これらの表からは、タタキ目の分類ごとに側縁タテケズリ回数や、用いられる布目の精粗に偏りがあることが看取できる。この偏りは、タタキ目による分類の有効性を示すとともに、それぞれが時期差あるいは製作集団を反映しているとみて良いのではないだろうか。製作の粗雑化・簡略化という観点から見るならば、分割面の整形を丁寧におこない、目の細かい布を使用する菱形格子目Ⅰ類から次第に分割面の整形が簡略化され、目の粗い布を使用する菱形格子目Ⅱ類、方形格子目Ⅱ類を経て方形格子目Ⅰ類、長方形格子目、繩目へと変化したとの想定もできる。ただし、各タタキ目間でも胎土や焼成の状況は各要素を横断して共通しており、同時期に近しい場所で瓦製作をおこなった集団・工人差である可能性も考慮でき、現状では明確に断定することはできない。今後の課題である。また、瓦の胎土についても注目すれば、平瓦・丸瓦のいずれの胎土にも、宮崎平野部の土器の胎土に特徴的に見られる砂礫が含まれている。したがって、この平瓦・丸瓦ともに在地での生産であることは明らかである。軒丸瓦にかんしても同様の砂礫が含まれており、当地域において製作されているものということができる。

第6表 平瓦・丸瓦製作技法分類表

	菱形格子目Ⅰ	菱形格子目Ⅱ	方形格子目Ⅱ	方形格子目Ⅰ	長方形格子目	ナデ消し
布目 (本/cm)						
布目 (本/cm)	15	1	1	0	0	0
	14	7	2	1	0	0
	13	3	1	1	0	0
	12	2	5	4	0	1
	11	2	4	4	0	3
	10	0	2	24	0	6
	9	1	1	13	2	1
	8	2	0	9	3	1
	7	1	0	10	4	0
側縁 タテケズリ	6		0	5	2	1
	2回以上	0	1	1	0	0
	2回	7	8	37	2	11
	1回	1	5	8	9	1

図示していないものも含めていること、また、不明のものは除いているため、数値は実測図・観察表とは一致しない

加えて、平瓦凸面に赤色顔料が付着しているものの存在にも注目できる。瓦凸面に赤色顔料がつく例は、瓦の葺足の目印として、あるいは建物の塗装の際に付着したものがあるが、いずれにしても軒先に使用された瓦にのみ見られる特徴である。これが平瓦凸面に見られるということは、本遺跡出土瓦が使用されていた建物には軒平瓦は存在せず、軒先まで平瓦が用いられていたと考えられる。そうであるとすれば、瓦の出土点数の割に1点の軒平瓦も存在しないことにも首肯できる。また、赤色顔料が付着した平瓦は端辺部分もケズリによって調整されている点にも着目しておきたい。

軒丸瓦の製作技術

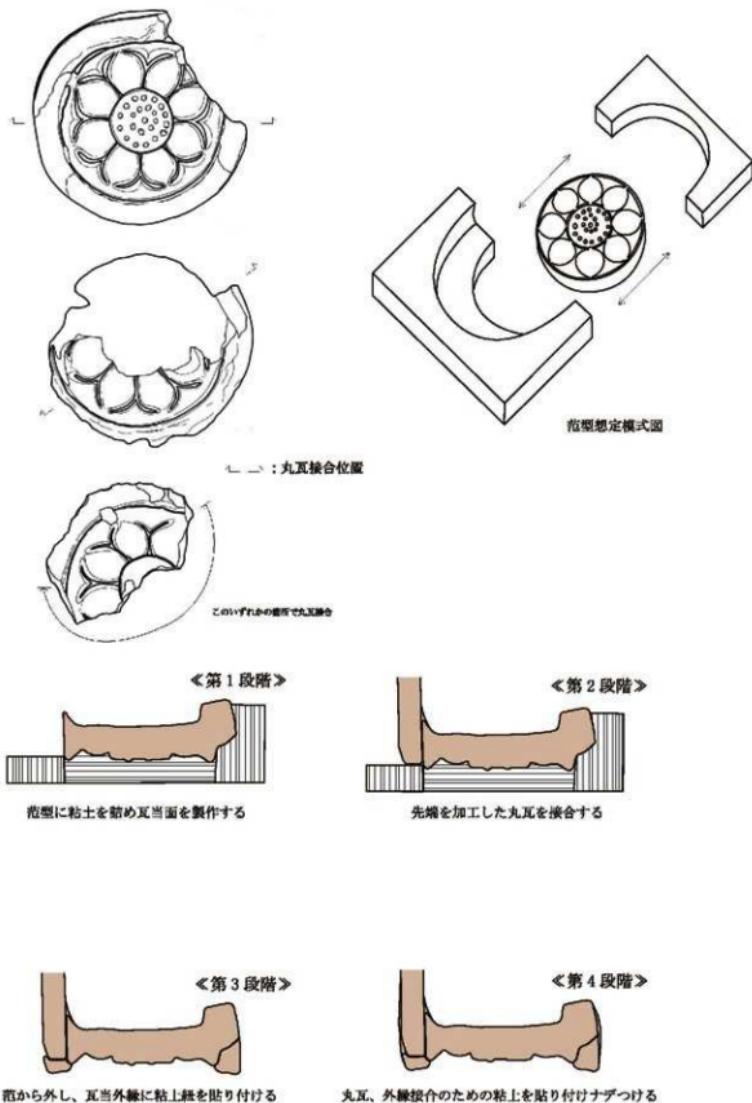
5点の軒丸瓦片はいずれも破片であり、全体形を知れないが、その概要について示す。3点の瓦当片はいずれも素糸八葉蓮華文をもつもので、円柱状の大きな中房と、ふくらみをもち先端部がやや尖った形状をもつ花弁が特徴的である。77を見ると、蓮子は中房中央の1つを中心としてその周りを2重にめぐるもので合計23個の蓮子がある。その他の2点については中房が遺存しておらず、判然としない。また、瓦当面外縁には突帶状の粘土紐が貼り付けられていて、直立縁状である。瓦当裏面外縁も突出しており、直立縁状になっている。この3点の瓦当片は、胎土や焼成にやや異なる部分があるが、花弁の形態的類似性やその配置の一一致から、同范関係にあると判断してよい。看取できる製作技法上の特徴も一致している。また、丸瓦の接合位置が、各瓦当片で異なっている点はこれら軒丸瓦の製作工程や製作に用いられた范の形状を検討する上で特に重要な要素であると言える。

これら3点の瓦当片とその他の軒丸瓦片の観察から、これらは接合式の軒丸瓦であると判断でき、以下のような製作工程が推測できる(第42図)。まず、瓦当製作のための范は3分割された型を組み合わせたものであると考えられる。これは各瓦当片で瓦当文様に対する丸瓦の接合位置が異なっていること、瓦当裏面の直立縁状部分が瓦当と一緒に形作られているということ、さらに組み合わせた型のわずかな隙間に入り込んだような粘土の痕跡が資料から観察できることから判断できる。そして、この組み合わせた型に粘土を詰めて瓦当面と瓦当裏面の直立縁が形作られる。その後、先端部が楔形に加工された丸瓦が接合される。それから軒丸瓦が范から取り外され、瓦当表面外縁に方形の粘土紐を貼り付けられ外縁を形作り、最後にこの接合部分および丸瓦の接合部分表裏面に薄く貼り付けた粘土をナデつけて接合が強化されるという製作工程である。また、瓦当裏面はハケ状の工具によって丁寧に調整され、平滑に整えられている。77の瓦当裏面には細い棒状の工具によって刻目が付けられているが、丸瓦接合位置などとの関係も見出せず、何を意図しているものか判然としない。

本遺跡出土軒丸瓦の年代

瓦の年代については、製作、使用、廃棄に至る時間経過が考慮される必要があり、俄かに伴出遺物の年代を充てる事は難しい。本項では本遺跡出土瓦の年代を考えるためにあたって、今回調査での出土状況や、類似する軒丸瓦の年代観も比較しながら検討したい。

本遺跡出土軒丸瓦のうち、遺構から出土したものは2点で、いずれも掘立柱建物2に付随する北側溝から出土している。この北側溝から出土した瓦以外の遺物では土師器壺が最も多く、完形にまで復元できるものも多かった。須恵器も出土しているが、少量であり、完形に復元できるも



第42図 軒丸瓦製作工程模式図

のは存在しない。また、土師器は9世紀後半に位置づけられるものであり、須恵器には8世紀前半に位置づけられるものが多い点に注意される。瓦の出土状況は、小片が多く完形になるものが無い点など須恵器に似た様相であることに注目しておきたい。

本遺跡から出土した素弁八葉蓮華文軒丸瓦は、北部九州を中心に各地に散見される。管見において、これらの中でも花弁や中房の形状、蓮子の個数などが本遺跡出土軒丸瓦と同一の特徴を持つものが2例存在している。すなわち、宮崎県西都市上妻遺跡A地区出土軒丸瓦と大分県大分市上野廃寺(金剛宝戒寺)の軒丸瓦である。西都市上妻遺跡例は、資料観察の結果、花弁の形状や配置、瓦当表面に残された范傷のような痕跡の一致などから、本遺跡出土軒丸瓦と同范であると判断された。また、製作技法についても本遺跡出土軒丸瓦と同じものであると判断できる。この軒丸瓦と同一層中から出土した遺物の年代は7世紀後半から8世紀前半に位置づけられている。上野廃寺(金剛宝戒寺)例は西都市上妻遺跡例と同范との指摘がされており(長津 1993 p.24)、かつ7世紀後半の須恵器が出土しているという。また、素弁蓮華文軒丸瓦を研究した小田富士雄の指摘によれば、この種の軒丸瓦は7世紀後半から8世紀後半に位置づけられるという(小田 1966 p. 162)。

以上から判断すれば、本遺跡出土の軒丸瓦の年代は、上記2例と同様の時期である7世紀後半から8世紀前半のいずれかの時期に位置づけておくことが最も妥当であると言えるだろう。ここで、軒丸の出土した掘立柱建物2北側溝の遺物出土状況を振り返ってみると、瓦と似た様相で出土した須恵器が8世紀前半に位置づけられ、本遺跡出土軒丸の年代も同様に8世紀前半に位置付けておく。平瓦、丸瓦にかんしても軒丸瓦同様の年代観を与えておきたい。なお、建物の年代と瓦の年代の齟齬については次節において検討している。

軒丸瓦の系譜

上述の小田の研究によると、素弁蓮華文軒丸は、豊前、筑前、筑後、肥前、肥後、豊後にみられ、北部九州に限定的な分布を示していることが指摘されており、中でも豊前を中心で分布している。また、周縁と蓮弁の組合せから変遷觀が示されているが、それを見ると、古式に位置づけられるものは豊前に多くみられる傾向が看取できる(小田 1966)。この状況から判断すれば、この素弁蓮華文軒丸瓦は豊前地域を中心とし、そこから九州各地へ波及していくということを推定してもいいだろう。本遺跡出土例、および西都市上妻遺跡出土例もこの流れの中でもたらされたものであることができる。上述のように、本遺跡出土瓦は、胎土の特徴から宮崎平野部で製作されたことに疑いなく、九州東沿岸を宮崎平野部にまで造瓦技術が伝播していたことを示すものとなった。本遺跡出土丸瓦に見られた模骨桶を用いる製作技法も豊前地帯に認められ(齋部麻矢 p.18)、平瓦・丸瓦を含めた体系的な造瓦技術の伝播があったことが分かる。

この素弁蓮華文の祖型は、朝鮮半島に求められる。本瓦の性格や、遺跡の性格を考える上では、朝鮮半島のいずれの地域にその影響を求めるか、そしてその伝播ルートは非常に重要な問題である。これまで、素弁蓮華文は百濟系として捉えられていたが、近年、古新羅の瓦の様相が次第に明らかになり、当該地域にも素弁蓮華文軒丸瓦が認められるようになった。本遺跡出土の軒丸瓦は、古新羅に類似する文様が見られるが、現段階では明確にできず、今後検討を重ねていく必要がある。

第2節 大型掘立柱建物の性格

今回調査で検出された遺構のうち、もっとも中心的なものは2棟の掘立柱建物である。通有の掘立柱建物と比べて、この2棟の掘立柱建物は規模が大きく注目できる。この建物の性格は、本遺跡の性格を知る上でもっとも重要となろう。したがって本節では、規模や構造などからこの2棟の掘立柱建物の性格を検討する。

建物の概要と年代

掘立柱建物1は、梁行3間、桁行6間の側柱建物である。東西に棟方向をとり、規模が東西12m、南北4.7mである。柱掘方4、5付近にやや乱れがあるものの、柱間隔は約1.8mと概ね整っている。長軸に直交する南北軸は北から約6度東に振っている。柱掘方は、壺掘り柱掘方で一部に布掘り柱掘方がある。基本的に方形ないし長方形で、壺掘り柱掘方の規模は0.8~1.6mである。確認できたいいくつかの柱痕跡から見て柱筋はかなりきれいに通っていたことが分かる。また、柱掘方の長辺もこの柱筋方向とほぼ平行になっている。庇や雨落ち溝といった付随施設は確認できなかった。

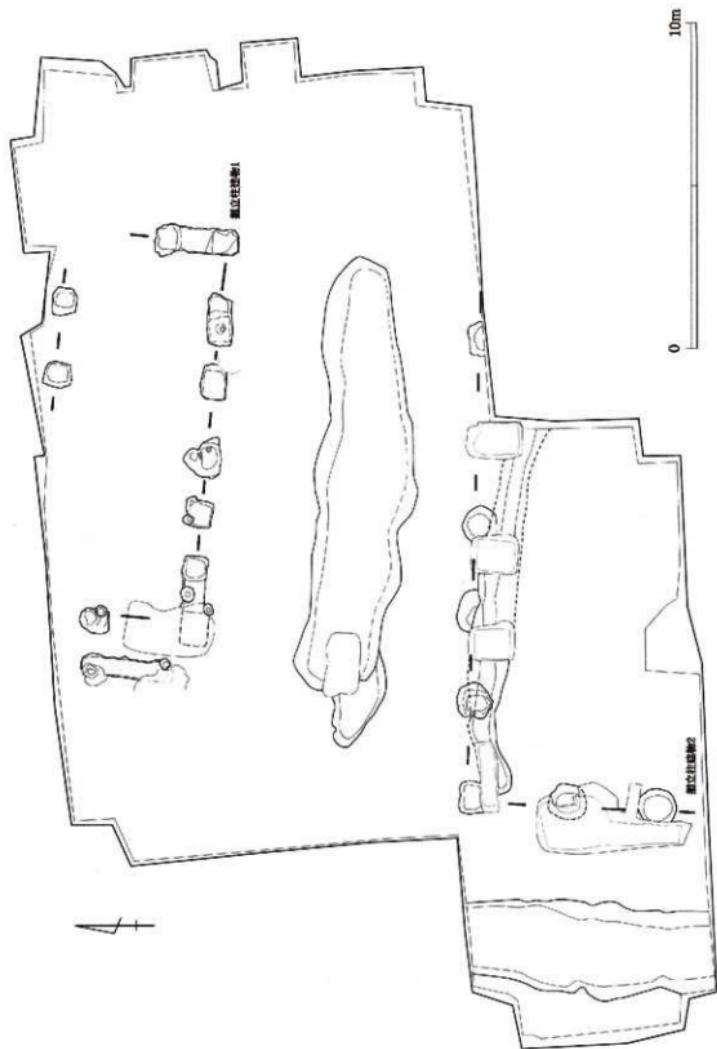
掘立柱建物2は、現状で梁行2間、桁行5間以上の側柱建物である。南半が調査区外、搅乱のため全体形を知れない。桁行は建物北側溝との関係から6間であったと推測できる。梁行は判然としない。東西に棟方向をとり、現状の規模が東西14.3m、南北5.9mである。柱間隔は約2.9mでほぼ整っている。長軸に直交する南北軸は北から約2度東に振っている。柱掘方は壺掘り柱掘方で、平面形態は円形である。掘方の規模は1.0~1.3mである。柱掘方の底面付近には、瓦が敷設されており、柱の沈下防止を目的としたものと思われる。この瓦の敷設位置から柱が据えられた位置を想定してみると、掘立柱建物1と同様に、柱筋のかなり通った建物であると判断できる。各柱掘方の底面レベル、敷設瓦の上面レベルを見ても、各柱掘方がほとんど同じである。また、本建物の北辺、西辺には雨落ち溝かと思われる溝が付随している。

この2棟の掘立柱建物は出土遺物から両者とも9世紀後半に位置づけられ、2棟の建物は、同時期に存在していたと考えることができる。棟方向をほぼそろえたこの建物配置や各建物の柱間、柱筋などから見れば、この2棟の建物の建築はかなり規格的におこなわれたことがわかる。規模の面を見ると、いずれも桁行が10mを超える大型の掘立柱建物で、平面積も掘立柱建物1が約57m²、掘立柱建物2が現状確認できる部分のみでも約85m²であり、かなり大型の部類にはいるものであるといえる。

掘立柱建物と瓦の関係

2棟の掘立柱建物はその年代を9世紀後半に位置づけた。それに対し、瓦の年代は8世紀前半であると前節において考えた。この2者の年代的隔たりは建物と瓦の関係を知る上で欠かかすことのできない検討課題である。そのためには、まず瓦の出土状況について若干の検討をしておく必要があろう。

瓦は、調査区内各遺構から出土しているが、もっとも瓦が集中しているのは掘立柱建物2に付随する溝、および柱掘方内である。このことから、瓦はこの掘立柱建物2にともなうものとして考えるのがもっとも適切と思われるが、柱根固めとして用いられていることから判断すれば、この瓦は、掘立柱建物2が建設される際には、すでに製品として当地に存在していたことになる。



第43図 捩立柱建物1・2位置図

そうであれば、瓦は、調査地に8世紀前半に当地に立っていた建物から転用した、あるいは掘立柱建物2建設に伴い他所で使われていた瓦を持ち込んだ、という可能性が考えられる。現状において、掘立柱建物1と掘立柱建物2は同時期のものであると考えられること、2棟の建物に建て替えの痕跡がないことなどから、瓦は上記想定の後者、すなわち他所からの持ち込みであると考えていいだろう。その具体的な場所は、現段階で明らかにしがたいが、下北方台地周辺のどこかあるいは、同范瓦が出土している西都市上妻遺跡周辺も候補の一つとして挙げられよう。

ここで残る今一つの問題として、この瓦が果たして掘立柱建物2に葺かれていたものかどうかという点を挙げることができる。下北方台地周辺や、宮崎市域全体を見渡しても、今回調査地以上に古代瓦が分布する地域は存在しない。調査地周辺から根固めのためにのみ持ち込んだ程度とすれば、本来の使用場所周辺に瓦分布の中心が存在するであろうし、上妻遺跡周辺から搬入したものであるとした場合、柱根固めのためだけに遠隔地からわざわざ瓦を持ち込むことは考え難い。したがって、この瓦は掘立柱建物2に葺かれていたものと考えたい。掘立柱建物1にかんしては、瓦葺建物であったか否かの判断が難しい。

また、出土した瓦を観察すると、小片ばかりで完形になるものが存在せず、瓦は掘立柱建物2が廃棄される時点、あるいはそれ以降に、当地からどこかへ持ち去られてしまった可能性も考慮される。

掘立柱建物の性格

本項では、以上の検討から見出された掘立柱建物の特徴を整理し、その性格について考えてみたい。

本遺跡で検出された掘立柱建物の特徴として、まずその規模の大きさと企画性の高さが挙げられる。いずれも桁行が10mを超え、柱掘方も0.8m以上と大型である。個々の掘立柱建物自身も柱筋などが通っており、柱間隔も概ね整っている。特に掘立柱建物2は柱間隔がいずれの柱掘方間でもほぼ2.9mであり規格性の高さがうかがえる。2棟の建物の配置も、軸方向をほぼ平行にしており、規格的な様相を見てとることができる。また、非常に多くの瓦が出土しており、掘立柱建物1については判然としないが、掘立柱建物2は瓦葺建物であったと判断された。さらに、特徴的な遺物として掘立柱建物2の北側、西側の溝から出土した多くの灯明皿がある。1点ではあるが、内面に墨が付着した須恵器壺も出土している。

これらの諸特徴から考えれば、まず一般の集落跡などに見られるような施設ではなく、公的な性格をもつ施設であったということは、明らかであろう。一般の集落においてはこれほどの規模、規格性をもつ建物は極めて稀であるし、古代において瓦葺建物は官衙あるいは寺院にのみ見られるものである。掘立柱建物に付随する溝から多くの灯明皿が出土することや、墨の付着した須恵器が存在している現状からは、これら掘立柱建物は古代寺院であると考えることが最も妥当であるように思われる。台地上には古墳時代後期において宮崎平野最大級の前方後円墳を含む下北方古墳群があり、この寺院はこれら豪族の氏寺のような性格をもつものであったかもしれない。

ただし、規格性の高さや、陸、河川交通の要衝に位置するなど官衙的性格もあることや、本建物を含む施設の全体像が明らかでないこと、性格を決定づけるような遺物が無いことから、宮崎郡衙にかかる官衙的な施設であるという可能性も依然残されている。

第V章 まとめ

第1節 調査成果のまとめ

今回の調査は、自治公民館建設に伴っておこなわれた発掘調査である。調査地の所在する下北方台地は、宮崎市域においてもっとも遺跡の密集する地域の地域であり、台地のほぼ全体を「下北方遺跡群」としている（第1図）。今回調査地は、その下北方台地上のほぼ中心部にあたり、以前から古代瓦が採集されるなど、古代における官衙関連遺構などの存在が想定されてきた場所にあたっている。調査では、古代に位置づけられる遺構、遺物を中心として、非常に多くの遺構、遺物が検出された。

古代以前に位置づけられる遺構には弥生時代の土坑1基、古墳時代の竪穴住居跡2軒などがある。弥生時代の土坑は性格不明であるが、長方形プランで深く掘り込まれたものである。土器の小片のみが出土した。古墳時代の竪穴住居跡はいずれも古墳時代中期から後期に位置づけられた。竪穴住居跡1には東壁にカマドが作りつけられており、周辺から土器が多く出土した。今回調査地北側にある下北方塚原第1遺跡において検出された地下式横穴墓と近しい年代にあり、古墳時代後期における下北方台地上での集落、墓域、また、前方後円墳と地下式横穴墓の関係などを検討する上で注目できる。

今回の調査で最も注目されたのが、古代の掘立柱建物とそれに伴う古代瓦である。建物は、いすれも、大型で方形あるいは円形の柱掘方をもち、桁行が10mを超える大型のものである。この両者が軸方向をほぼ平行に、南北に並んで検出された。瓦はこのうち南側の掘立柱建物2を中心に出土し、掘立柱建物2は瓦葺建物であると考えられる。掘立柱建物1については判然としない。この規格的な配置をもち瓦葺建物を含む大型掘立柱建物の性格は、規格的な建物配置や規模の大きさ、瓦葺建物であること、建物に付随する溝から灯明皿として用いられた土師器壺が多く出土していること、同范関係にある瓦が出土した遺跡の性格などから、古代寺院である可能性が最も高いだろう。調査地周辺は從来から瓦が表面採集されており、古代における官衙関連施設あるいは古代寺院の存在が推定されてきたが、今回の調査結果はそれを裏付けるものとなった。また、瓦は、胎土から宮崎平野部で製作されたことに疑いないが、その造瓦技術は同范軒丸瓦の分布から九州東沿岸を伝って伝播してきたことが考えられた。加えて、瓦と建物の時期的関係や、出土状況の検討などから、瓦は建物建築以前にいずれかの場所で使用されていたものが、建物の建築にともなって搬入されて使用されていると考えられた。

古代の遺構にはその他に、溝状遺構1条、柱列2、土坑8基などがある。土坑の中には、粘土貯蔵用や、土師器片の廃棄土坑であったと思われるものがあった。また、注目される遺物にフィゴ羽口、鉄滓、銅滓がある。これらの遺物からは当地周辺に金属器を製作する工房の存在を想定できる。金属製品製作関連遺物については今回調査地の北に隣接する下北方塚原第1遺跡からも金床石などが出土している。

古代以降の遺構には中世の溝状遺構がある。東西方向に延びる溝状遺構で、掘立柱建物2、溝状遺構1を切っていた。糸切底の土師皿などが出土している。周辺において中世に位置づけられる明確な遺構は少なく、注目できる。

第2節 展望と課題

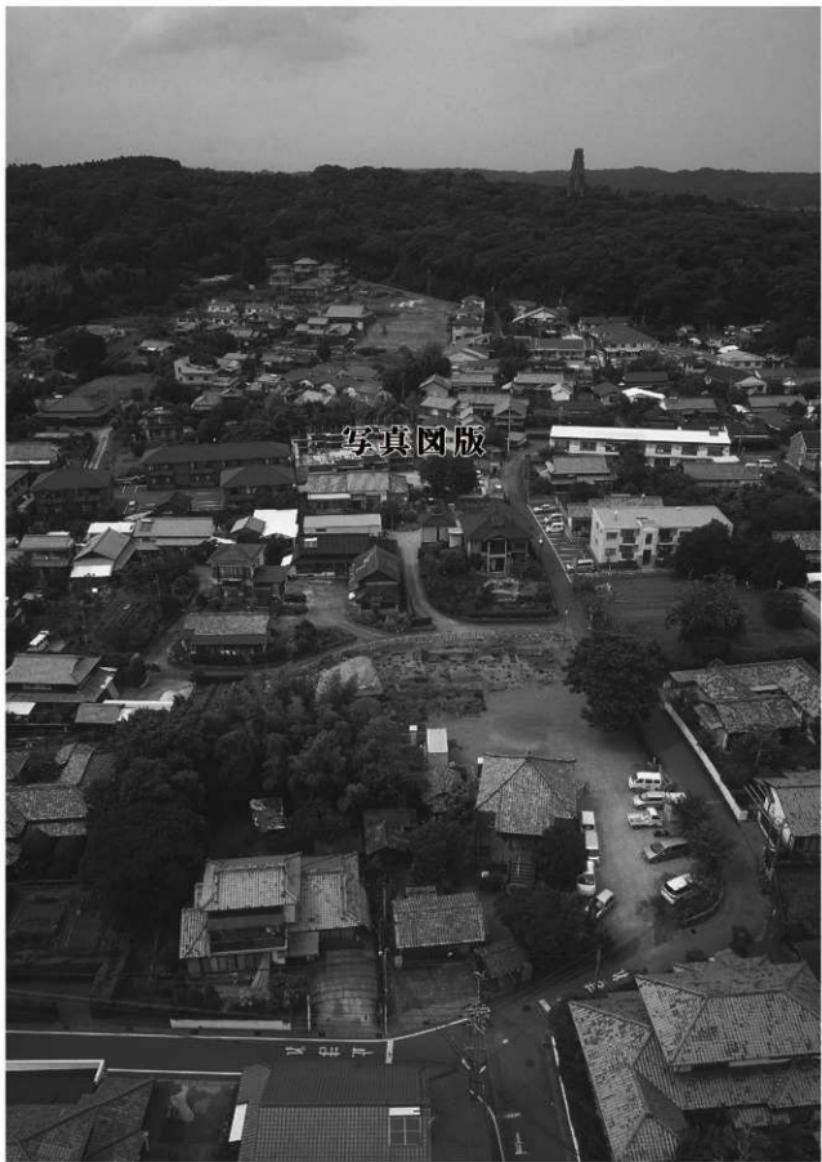
今回の調査では、古代寺院と考えられる遺構が検出され注目された。しかし、調査面積が非常に狭小のことから、施設全体の建物配置やその構造などが明らかになったわけではなく、依然として寺院以外の官衙関連遺跡である可能性もある。今後、これら遺構群の広がりなどを検討していく必要がある。また、古代寺院であった場合でも、古代においては寺院周辺に郡衙などの官衙関連施設が存在する例がかなり多く、調査地周辺、下北方台地上のいずれかの場所に宮崎郡衙が存在している可能性は極めて高い。また、工房を示唆する遺物の存在しており、台地上に郡衙、工房、寺院といった施設が点在する可能性が高くなつたと言える。今後そうしたことを見頭に置きながら当地域の調査研究がおこなわれる必要がある。

瓦について多くのことが明らかになった。ただし、その製作地、搬入元や9世紀に多くみられる繩目タタキが施された瓦との関係性についてなど検討されるべき課題が多い。

今回の調査成果から求められた、展望と課題を踏まえながら検討を進めていくことで、古代における宮崎平野部の様相をより鮮明に明らかにできるものと考える。

＜主要参考文献＞

- 池邊千太郎ほか編 1999『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.10 1998年度 大分市教育委員会
- 齋部麻矢 2000「2 九州における初現期の瓦」『古代瓦研究』—飛鳥寺の創建から百濟大寺の成立までー
- 奈良国立文化財研究所
- 上原真人 1984「瓦の見方について」『富山市考古資料館紀要』第3号 富山市考古資料館
- 小田富士雄 1966『百济系卑弁軒丸瓦考—九州発見朝鮮系瓦の研究(二)ー』『史淵』第95輯 九州史学会
- 金丸武司編 2008『下北方5号墳周辺遺跡』宮崎市文化財調査報告第68集 宮崎市教育委員会
- 金丸武司編 2009『下北方下郷第4遺跡』宮崎市文化財調査報告第74集 宮崎市教育委員会
- 龜田修一 1994「瓦から見た畿内と朝鮮半島」『古代王権と交流5—ヤマト王権と交流の諸相』名著出版
- 九州歴史資料館編 1981『九州古瓦図録』柏書房
- 佐原眞 1972「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58卷第2号 日本考古学会
- 瀧本正志 1983「平瓦桶巻作りにおける一考察—粘土分割ための指標の種類についてー」『考古学雑誌』第69卷 第2号 日本考古学会
- 竹中克繁編 2008『下北方1号墳周辺遺跡』宮崎市文化財調査報告第71集 宮崎市教育委員会
- 竹中克繁編 2008『下村窯跡群報告書Ⅱ 遺物編』宮崎市文化財調査報告第72集 宮崎市教育委員会
- 長津宗重編 1993『国衙・都衙・古寺跡等の範囲確認調査概要報告書 Ⅱ』宮崎県教育委員会
- 西嶋剛広編 2010『下北方塚原第1遺跡』宮崎市文化財調査報告第78集 宮崎市教育委員会
- 宮崎県編 1998『宮崎県史 通史編 古代2』宮崎県
- 山中敏史 1994『古代地方官衙遺跡の研究』 増書房
- 山中敏史編 2003『古代の官衙遺跡 I 遺構編』奈良文化財研究所
- 吉本正典編 2001『寺崎遺跡—日向国を含む官衙遺跡ー』宮崎県教育委員会



写真図版

調査地遠景

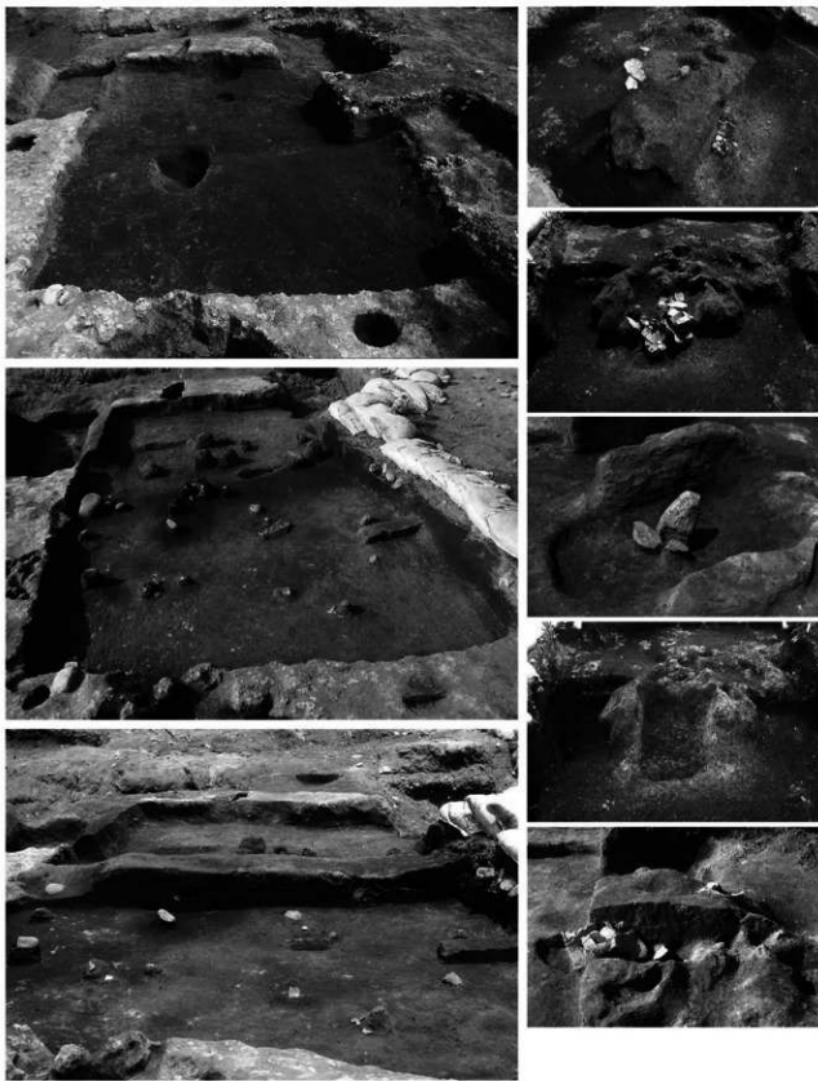
図版1



調査地周辺航空写真



調査地全景



左列 1段目：竪穴住居跡1完掘状況（南から）
2段目：同遺物出土状況（南から）
3段目：同跡断面（東西方向、南から）

右列 1段目：カマド検出状況（北西から）
2段目：カマド内遺物出土状況（西から）
3段目：軽石製支脚検出状況（南から）
4段目：カマド完掘状況（西から）
5段目：カマド断面（南から）



竪穴住居跡 2 完掘状況（西から）



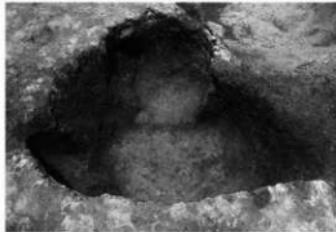
竪穴住居跡 2 剥離面（南北方向西から）



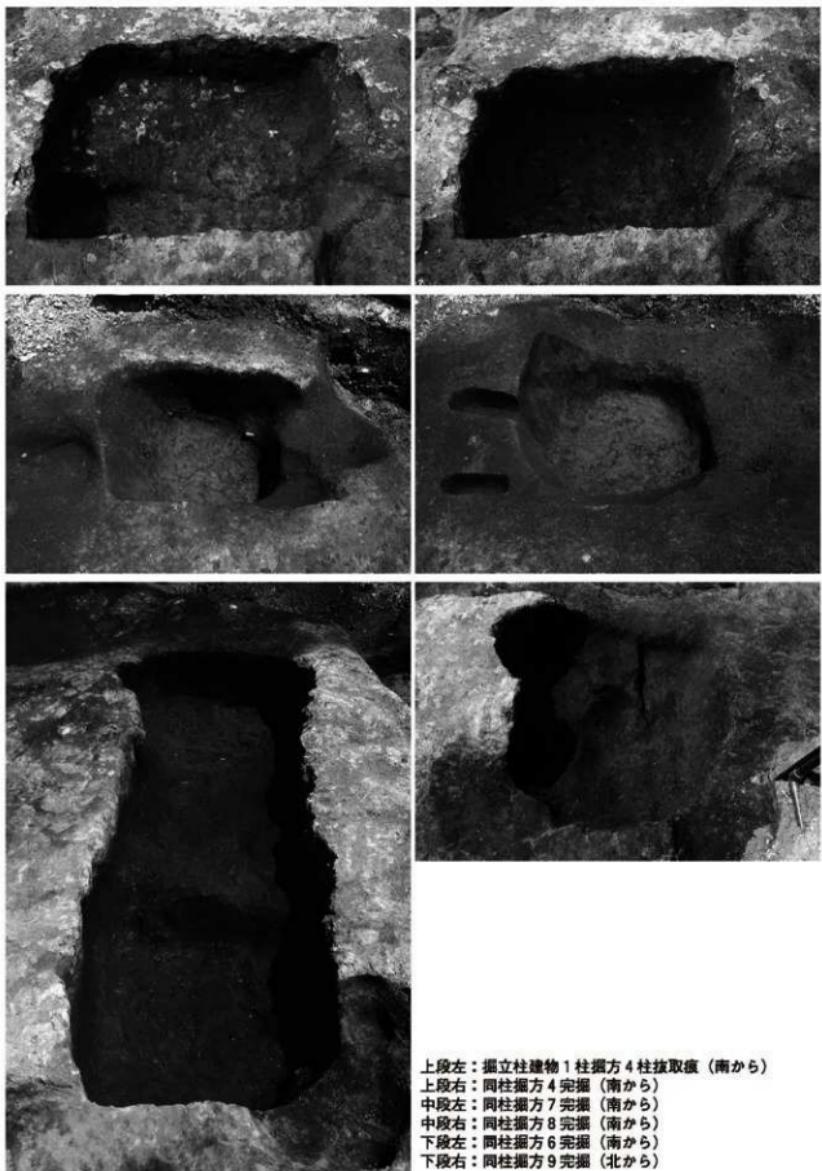
土坑 1 完掘状況（南東から）



掘立柱建物 1 (西から)



- 左上：柱掘方 1 完掘
(南から)
左下：柱掘方 3 完掘
(南から)
右上：柱掘方 2 完掘
(南から)
右下：柱掘方 5 完掘
(南から)



上段左：掘立柱建物 1 柱掘方 4 柱抜取痕（南から）
上段右：同柱掘方 4 完掘（南から）
中段左：同柱掘方 7 完掘（南から）
中段右：同柱掘方 8 完掘（南から）
下段左：同柱掘方 6 完掘（南から）
下段右：同柱掘方 9 完掘（北から）



掘立柱建物 2（西から）



左：柱掘方 1 瓦敷設状況 1（東から）、右上：同敷設状況詳細（東から）、同完掘状況（南から）